

私たちとは何であるか: 動物説と構成主義*

横路佳幸

概要

In personal ontology, animalism and constitutionalism are rival answers to the metaphysical question “What are we?” or “What is our nature?” Roughly, animalism says that we are biological animals, while constitutionalism says that we are not identical to animals but are constituted by them. Each side has a notable defender: Eric Olson and Lynne Rudder Baker, respectively. In this article, I isolate and explain some of the key features of both theories in a way that non-specialists can easily understand, by focusing on each standard and typical line of thought. I contrast Olson’s animalism with Baker’s constitutionalism, and I make clear where the differences between the two competing theories lie.

The article is divided into six sections. In section 1, I sketch the historical background to the recent debates on personal ontology and explain some reasons that I deal only with animalism and constitutionalism among others. In section 2, I offer a survey of animalism in its basic form, the varieties of it, and some arguments for the claim that we are animals, including what is called *the thinking animal argument*. In section 3, I take up at least three problems of animalism, *the transplant intuition problem*, *the thinking brain problem* (as well as *the remnant person problem*), and *the corpse problem*, and then overview the standard animalist responses to these. In section 4, I offer a survey of constitutionalism in its basic form, the varieties of it, and an argument for the claim that we are not identical to animals—what I call *the non-identity argument*. In section 5, I take up at least three problems of constitutionalism, *the ‘we are animals’ problem*, *the too many thinkers problem* (or *the zombie problem*), and *the grounding problem*, and then overview the constitutionalist responses to these. In section 6, I clarify a disputed point between animalism and constitutionalism.

Keywords: personal ontology, animalism, constitutionalism, Eric Olson, Lynne Rudder Baker.

* CAP Vol. 10 (2018-2019) pp. 114-165. 受理日: 2019.02.08 採用日: 2019.04.23 採用カテゴリ: サーヴェイ論文 掲載日: 2019.06.10.

1 序論: 人の同一性から人の存在論へ

本稿の目的は、**私たちは何であるか** (*what are we?*) を中心的な問いとして、人の存在論 (personal ontology) における二つの立場、動物説と構成主義をサーヴェイすることである。

私たちは何であるかという問いは、通常次のように述べ直すことができる。すなわち、私たちの最も一般的で基礎的な形而上学的な特徴とはどのようなもので、私たちはいかなる本質や同一性を持ち、どのような種類の存在者なのだろうか。差し当たり、ここで言われる「私たち」の代表例とは、これを読むあなたやあなたの家族、本稿の著者、現在のアメリカの大統領であるドナルド・トランプなどである。

詳しい議論に入る前に、「私たちは何であるか」に対する簡潔な答えの候補を列挙することにしよう。細かな論点を度外視すれば、それは大きく次の 7 つに分類される (Olson 2007, pp. 6–8; Bailey 2016; Blatti 2016a)。

- | | |
|---------------------------|----------------------------|
| (a) [動物説] | 私たちは、動物すなわち生物学上のヒトである。 |
| (b) [構成主義] | 私たちは、身体によって構成される人である。 |
| (c) [脳定位説 ^{*1}] | 私たちは、心理的に機能する脳である。 |
| (d) [ワーム説 ^{*2}] | 私たちは、時間的諸部分から成る四次元ワームである。 |
| (e) [二元論 ^{*3}] | 私たちは、諸部分を持たない心的実体である。 |
| (f) [束理論 ^{*4}] | 私たちは、心的状態の束としての非実体的な事物である。 |
| (g) [反実在論 ^{*5}] | 私たちは、存在していない。 |

このリストは、各理論内部の多様性を十分に反映したものではない。また、(a)から(g)は必ずしも互いに排他的な見解というわけでもない^{*6}。しかしながら、人の存在論の議論が現在どのような状況にあるのかを大

^{*1} 現代における脳定位説の主な支持としては、Searle 1983; Nagel 1984; Persson 1999; McMahan 2002; Tye 2003; Campbell and McMahan 2010; Parfit 2012 を見よ。

^{*2} 現代におけるワーム説の主な支持としては、Perry 1972; Lewis 1976; Heller 1990; Hudson 2001; Noonan 2003 を見よ。

^{*3} 現代における二元論の主な支持としては、Foster 1991; Lowe 1996; Plantinga 2006; Unger 2006; Meixner 2010; Zimmerman 2010; Robinson 2016 を見よ (歴史的にはデカルトも支持者と目される)。二元論は、心の哲学や人の存在論において悪評が後を絶たなかった立場であるが、特筆すべきことに、この数十年で徐々に復活を遂げつつある。

^{*4} 現代における束理論の主な支持としては、Quinton 1962; Rovane 1998; Campbell 2006 を見よ (歴史的にはヒュームも支持者と目される)。

^{*5} 現代における反実在論の主な支持としては、Unger 1979; Braddon-Mitchell and Miller 2004; Stone 2005; Benovsky 2018 を見よ。

^{*6} たとえば、Hudson 2001 が提案する「私たちは、脳と中枢神経系の時間的諸部分からなる四次元ワームである」という見解は、脳定位説とワーム説のハイブリッドな理論とみなすことができる。また、Heller 1990 が提案する「私たちは、厳密な意味では存在しない規約的对象である一方で、私たちの占める時空領域には時間的諸部分から成る四次元ワームが存在する」という見解は、ワーム説と反実在論のハイブリッドな理論とみなすことができる。

雑把に概観するには、このリストは簡潔ながら役に立つだろう。そこから読み取ることができるのは次のことである。すなわち、私たちが何であるかの解明は、その一見した単純さとは裏腹に、テクニカルで多岐にわたる形而上学的な道具立てを——たとえば、「構成」や「時間的諸部分」、「実体」などの諸概念を——通じて行われてきた、という事実である。

これまで人の存在論では、(a)から(g)以外にも数多くの立場が提唱されてきた^{*7}。しかし、サーヴェイを行うにあたって私は、これらすべてではなく、上記リストにある(a)と(b)のみ、すなわち動物説と構成主義のみを論じ、両者についてできる限り平易に概観を行うことにしたい。この二つに限定して論じる理由は主に次の二点に分けられる。一つの理由は、動物説と構成主義の両理論には、相手の議論を互いに批判し合うことを通じて発展してきた「対抗理論」という側面があり、その関連文献は相互参照されることが比較的多いからである。そのため、一方の理論をよりはっきりと理解するには、もう一方のあい対する理論も併せて紹介することが有意義だと思われる。また、動物説と構成主義に限定して論じるもう一つの理由は次のように説明することができる。すなわち、この二つの理論の間には、人に関する哲学上の議論でかつて盛んに論じられた二つの陣営の違いを色濃く反映する興味深い対立が存在するように思われるからである。その二つの陣営とは、**人の同一性に関する身体的基準と心理的基準**である。

人をめぐる哲学上の議論において、1970年代から80年代にかけて中心的な地位を占めたのは次のような問いである。すなわち、過去のあなたと未来のあなたが時間を通じて持続し同一であることはいかなる事態に存し、またあなたが生き続けるための基準や必要十分条件とはどのようなものだろうか。この古典的な問いに対し、一方の陣営は「同じ物理的な身体を通時的に保持していること」を重視し、もう一方の対立陣営は「心理的に連続し継続していること」を重視した。両陣営の対立を支える問題意識は、最も簡潔に表現するならばこう述べることもできる。すなわち、私たち人の通時的な同一性や持続は、物質的な身体の保持または心理的な継続性のどちらによるのだろうか。分割された脳の移植またはブラウンソン(split-brain; Brownson)の事例や、二人の人による身体を取り換え(body-swap)の事例、遠隔輸送装置(teletransportation)など、よく知られた——しばしばSF的とも形容される——思考実験が考案されたのも、こうした時代においてである^{*8}。

ただし、実際の小史を紐解けば明らかであるように、両陣営の対立はいくぶん誇張されたものである。というのも、身体的基準を重視する陣営は、現実にはほとんど哲学者の支持を獲得するには至らず、明ら

^{*7} たとえば、以下の五つの見解は(a)から(g)への分類が(不可能ではないにせよ)困難だと思われる。第一に Chisholm 1978 が示唆する「私たちは、脳の中に位置する諸部分を持たない微小な物理的存在者である」という見解、第二に Dennett 1992 が提案する「私たちは、理論家によって作り出された虚構としての抽象物である」という見解、第三に Swinburne 1997 が提案する「私たちは、非物質的で創発的な魂と物質的な身体から成る合成物である」という見解、第四に Clark and Chalmers 1998; Clark 2003 が提案する「私たちは、生物と(道具や他者などの)外部リソースから成る拡張された認知システムである」という見解、第五に Hawley 2001; Sider 2001 が提案する「私たちは、時間的諸部分という瞬間的な段階である」という見解、最後に Strawson 2017 が示唆する「私たちは、ある意味では人間であるが、もう一つの意味では単一の心的で物理的な経験主体としての自己である」という見解である。

^{*8} 各思考実験は順に、Shoemaker 1963, p. 23; Williams 1970; Parfit 1984, p. 199 による。一般に、このような奇想天外な事例への直観的な応答を用いて哲学理論を作る方法は、**事例に頼る方法**(*method of cases*)と呼ばれる。Johnston 1987 以来、その方法の是非もまた議論の対象である。

かに優位に立っていたのは心理的基準を重視する陣営だったからである^{*9}。この心理的な諸特徴への偏りは、一つには「人」が哲学の表舞台に登場した経緯に鑑みればそれほど奇妙なことではないだろう。人概念は、ジョン・ロック以来、自己意識や記憶、意図、欲求などの心理的な諸特徴と強く結び付くものとして理解されてきた。ロックのよく知られた定義に従うと、「人とは、推論・反省し、思考するような知的な存在者」であり、「意識が過去の行為や思考へと遡って届きうる限りにおいて、そうした人の同一性はそれだけ遠くにまで及ぶ」(Locke 1975 [1690], II. xxvii. 9)。このため、心理的基準を重んじる陣営が一定の支持を獲得してきたのは、少なくとも部分的には、人という概念とその同一性を心理的に捉えることを動機づけるような強固なロック的源泉が存在するおかげである。現在、この陣営はしばしば**新ロック主義**(*neo-Lockeanism*)とも呼ばれている。

他方で、心理的基準が偏重されるもう一つの背景には、より素朴な直観も関係するだろう。「人」が哲学的に導入された経緯や系譜からまったく独立に考えるとしても、人の同一性や持続に対する私たちの直観的な理解は、一般に心理的な諸特徴を重視する傾向にある。つまり、あなたは身体ではなく心理的なものに基づいて持続するという指摘は、私たちの日常的な直観や常識に強く訴えかけるものだと考えられる。このことは、経験的にも現在まで確からしく実証されてきた事柄である^{*10}。その結果、人の同一性に焦点を当てた問題設定では、ロック的源泉だけでなく、私たち自身の素朴な直観もまた議論の枠組みを形成することとなり、身体的基準よりも心理的基準の方が——圧倒的と言っても過言ではないほどに——優勢であり続けたのである。

しかしその後、人に関する哲学的議論は、現代の分析形而上学の発展と連動するような形で、1990年代後半において新しい展開を迎えることとなった。その契機となったのが、**動物説**(*animalism*)と**構成主義**(*constitutionalism*)の本格的な登場である。それぞれの立場の先導的・中心的な提唱者として知られるエリック・オルソンとリン・ラダー・ベイカーは、「人」の存在論を論じるにあたって次のような認識において共通していた。その認識とは、人の同一性基準や持続条件を明らかにするだけでは、「私たちとは何であるか」を完全に解明したことにならない、というものである。たとえば、人の同一性に関して新ロック主義が妥当であると仮定しよう。このとき、現在のあなたが時間を通じて生き続けるための条件は、何らかの心理的な特徴から明らかにされる。しかし、そうしたときでも新ロック主義それ自体は、私たちの一般的で基礎的な形而上学的な本性を十分に解明するものではない。なぜならば、「私たちとは何であるか」という問題は本来、同一性だけでない多様な問題領域から成るからである。たとえば、心理的な特徴によって持続する

^{*9} このことは、各陣営の文献数の差だけを見ても一目瞭然である。身体的基準を重んじる陣営に属するのは Williams 1970; Thomson 1997 であるが、心理的基準を重んじる陣営には Perry 1972; Lewis 1976; Parfit 1984; Noonan 2003 をはじめとして数多くの論者が属し、こちらは枚挙にいとまがない。また、Bourget and Chalmers 2014 による現役の哲学者に対する大規模な調査によると、人の同一性において心理的基準を重んじる立場は(当該分野に詳しくないと回答した者を除けば)現在でも最も人気を博している立場である。以上から、人の同一性の議論の小史は——Williams 1970 が最も古い関連文献の一つであることにも鑑みると——より正確には次のように言えよう。すなわち、ウィリアムズによる身体的基準が登場した直後に関連文献数が増大すると同時に心理的基準が優勢になり、現在に至るまでの傾向は続いている、と。なお、人の同一性の議論については、鈴木 2014; Kind 2015 が優れた入門を提供している。

^{*10} たとえば、Nichols and Bruno 2010; Hood, Gjersoe, and Bloom 2012 を見よ。ただし、これらデータが哲学的理論にどのような影響をもたらすかについては、いわゆる実験哲学上で論じられるべき問題である。

あなたは、心理的機能を担う脳そのものかもしれないし、心理的な結び付きによって時間的諸部分が統一されるような四次元ワームかもしれないし、心的実体としての非物質的な魂かもしれないし、多様な知覚を集めただけの単なる束かもしれない。言い換えれば、あなたが心理的な継続性のおかげで持続し同一性を保持するということは、あなたがこれらの可能性のうちいずれの存在者であるのかを特定するものではない。さらに、あなたがどのような本質的性質を持ち、どのような空間的または時間的諸部分を持つ（または持たない）のかという問いも、新ロック主義単体では解決することができないだろう。それゆえ、仮に私たちの同一性や持続の問題を解決したとしても、「結局のところ、私たちとはどのような形而上学的特徴を持った存在者であるのか」という疑問は、看過できない形而上学的問題として残り続けてしまう^{*11}。

こうして、かつて哲学上の主要かつ重要なテーマの一つとして関心を集めた人の同一性や持続の問題は次第に、私たちとは何であるかという複合的な根本問題の一つとして包摂されることとなった。現在この問題に取り組む者は、私たちの一般的で基礎的な特徴・本性を幅広く明らかにするために、以前にも増してより詳細かつ多岐にわたる形而上学的議論を用意せねばならない^{*12}。著者の見立てでは、こうした潮流を当該分野でいち早く作り出し、人の存在論を牽引してきた中心人物は、オルソンとベイカーである。

しかしながら、この二人がそれぞれ提案する動物説と構成主義という見解は、存在論上の立場としては明確な対比をなす。一方でオルソンは、人の同一性の議論においては心理的基準よりも身体的基準にシンパシーを持ち、他方でベイカーは、人に特徴的なものが身体的特徴ではなく心理的特徴なものであると認める。そのうえで彼らはそれぞれ、人の存在論全体において新たな観点を導入する。それは、**生命を持つ動物と心理的な人の構成**という観点である。オルソンの目標は、現在まで優勢と考えられる新ロック主義に反旗を翻しつつ、従来の身体的基準を大きく乗り越えるような理論、すなわち動物説を確立することである。これに対し、ベイカーの目標は、大きく見れば新ロック主義に接近しながらも、心理的な特徴だけでなく身体または動物の重要性も取り込むような理論、すなわち構成主義を確立することである。前者の動物説は、私たちは生命を持った動物であると主張するのに対し、後者の構成主義は、私たちは動物から構成される心理的な人であると主張する。いまや、この両理論の対立が、人の同一性・持続に関するかつての対立図式を部分的に引き継いだものであるのは明らかである^{*13}。換言すれば、「人の通時的な同一性は身体と心理的な特徴のどちらにあるか」というかつての論争は、「私たちとはつまるところ動物なのか、それとも動物から構成される人なのか（または、それ以外の存在者なのか）」というより包括的な議論へと徐々に変質したと言えよう。とりわけ、動物説はこのおよそ 20 年の間に——かつての身体的基準とは対照的に——構成主義の主要なライバル理論としての地位を確立し、心理的な諸特徴への偏重は徐々

^{*11} とりわけ、特定の新ロック主義（いわゆる広いロック主義）、すなわち心理的な継続性さえ保持していれば、その物理的基盤はなんであれ人は持続すると考える立場は、Olson 2007, pp. 19–21 に従うと、「私たちとは何であるか」という観点から考えると特定の困難を引き起こしてしまうとされる。

^{*12} たとえば、Hudson 2007, p. 217 によると、人の存在論を構築する際にとるべき戦略は、「時間を通じた持続の一般的な形而上学を探究」し、「組成（中略）、あいまい性と空間領域の占有、時制に関する述定と貫世界的同一性などについてあなたが持つ最善理論を考慮する」というものである。

^{*13} もちろん、動物説と構成主義以外の立場もかつての二陣営の対立図式を引き継ぐことは忘れてはならない。中でも、脳定位説や二元論は、構成主義と同程度には心理的基準の有望な「後継者」たりえる。

にはあるが再考を迫られつつある。さらに、この両理論の対立に基づいた諸論点は現在、人の存在論に留まらない広範囲の領域において興味深い示唆や応用可能性をもたらし始めている^{*14}。いま私たちは、「私たちとは何であるか」という自己反省的な問題圏が豊かに発展しつつある道程の、まさしく最先端に立っているのである。

先述したように、本稿の目的は、動物説と構成主義をサーヴェイすることである。このとき私は、両理論の支持者の中でも、とりわけ上記のオルソンとベイカーによる標準的な見解・応答を中心に議論を進めることにしたい。彼らの主張は、大雑把にはそれぞれ次のように要約することができる。すなわち、一方のオルソンの動物説によると、私たちは誰しも、ホモ・サピエンスという生物種に属する動物に他ならず、私たち動物の通時的同一性や本質は生命維持機能の保持にあると考えられる。これに対し、他方のベイカーの構成主義によると、私たちは誰しも、いかなる動物とも数的に同一ではない代わりに動物によって構成される存在者としての人には他ならず、私たち人の通時的同一性や本質は特定の心理的性質の保持にあると考えられる。本稿では、この二つの標準的な見解の吟味を主軸とすることで、人の存在論における動物説と構成主義一般を、非専門家にもわかってもらえるよう比較的平易な仕方では概観することとする。

本稿は次のように進行する。第2節では動物説による主張や論証、多様性を概観し、第3節では動物説に対してこれまで提起されてきた問題とそれに対する応答をまとめる。第4節では構成主義による主張や論証、多様性を概観し、第5節では構成主義に対してこれまで提起されてきた問題と応答をまとめる。最後の第6節では動物説と構成主義の対立を簡潔に整理する。

2 動物説の主張

2.1 動物説の背景

私たちは、いったいどのような種類の存在者であるのか。動物説は、この問いに対しあまりにも当然と思われる答えを提供する。それによると、私たちは動物、特にヒトに他ならない。たとえば、「あなたが鏡を見ると、一匹の動物があなたを見返している」(Olson 2007, p. 23)と考えるのはごく自然のことである。逆に述べれば、もしあなたが動物ではないとすれば、とある動物があなたとは別の存在者として鏡に映ることとなる。これはにわかには信じがたい帰結である。このことから、動物説は、第1節で掲げられた7つの立場の中では私たちの常識に最も素朴な形で寄り添う見解であると言える。

驚くべきことに、動物説が哲学において注目と支持を集め始めたのは、そう遠い昔のことではない。これまで少なくない哲学者が、動物説に相当する考えを否定してきたか、あるいは動物という概念について

^{*14} 人の存在論に基づく示唆や応用可能性が見られるトピックは、本稿の随所から徐々に明らかとなるだろう。たとえば、心理的継続性に頼る直観をめぐる実験哲学(注10;第3.1節)、自身が動物か人のどちらであるかを知ることをめぐる自己知の認識論や一人称代名詞の指示をめぐる言語哲学(第2.4節;第5.2節)、動物の本質や進化論的説明をめぐる生物学の哲学(第2.3節;第2.4節;第5.3節)、脳死判定や実践的関心、人工妊娠中絶をめぐる倫理学(注31;注33;注48)、死後の生や復活をめぐる宗教の哲学(注52)、実体種性質や段階種性質、死、統一性としての構成関係などをめぐる形而上学(第2.3節;第3.3節;第4.2節;第5.2節)などである。

積極的に議論しようとはしてこなかった。その主たる理由の一つは、ロックによって導入された「人」と「動物」の区別が長らく強い影響力を持ったからである (Olson 2003; Snowdon 2014b, p. 11)。第1節で述べたように、ロックは、自己意識や記憶などの心理的な諸特徴こそが人概念にとって本質的であると考え、「人の同一性すなわち理性的な存在者の同一性は、意識のみに存する」(Locke 1975 [1690], II. xxvii. 9)と主張した。他方でロックは、人を人間 (*Man*) から峻別し、人間の同一性は、「同じ継続する生命 (*Life*) に関与することそのものに存する」(*ibid.*, II. xxvii. 6)とみなした。ここで言われる「人間」とは、「特定の形を持った動物」(*ibid.*, II. xxvii. 8)のことである。それゆえ、意識に依拠する人の同一性は、生命に依拠する人間または動物の同一性から明確に区別されるということが導かれる。この帰結が与えた影響の大きさは、かつて盛んに論じられた「人の同一性」の議論においても例外ではなく、そこで多くの論者は人概念を新ロック主義の観点から積極的に取り上げる一方で、動物という概念をほとんど顧みなかったのである。

しかしながら、人をめぐる形而上学的議論の中心が(第1節で見たように)「**私たち**とは何であるか」という問いへと変遷するにつれ、人概念の分析は必ずしも私たちの基礎的な特徴や本質を明らかにするとは限らないと考えられるようになった。それと並行して、心理的な諸特徴に焦点を当てるロック的な見解以外にも様々な選択肢が検討され始めた。その候補として提案された動物説はいまや、常識や直観に適合するだけでなく、私たちの存在論的な地位を明らかにする有力な見解の一つとなっている。代表的な支持者として挙げられるのは、オルソン、ピーター・ヴァンインワーゲン、ポール・スノードン、デイヴィッド・ドゥグラツィア、ステファン・ブラッティである (e.g. Olson 1997b; van Inwagen 1990; Snowdon 1990; DeGrazia 2005; Blatti 2012)*¹⁵。以下では、オルソンの見解を中心として、動物説がどのような内実を持ち、どのような根拠に基づいて支持されるのかを見ていくことにしよう。

2.2 動物説をめぐる諸注意

多くの動物説論者が自説を開陳するにあたって真っ先に注意を促すのは、「**私たちは動物である**」という主張が往々にして誤解を招きやすいという事実である。いま、この主張を「**私たち**」、「**動物**」、「**である**」の三つの語に分解してみよう。すると、動物説の枠組みでは、それぞれの語は次の意味を持つものとして理解される (Johansson 2007; Olson 2007, ch. 2; Snowdon 2014b, ch. 1; Bailey 2015; Blatti 2018)*¹⁶。

第一に、「**私たち**」とは、「あなた」や「私」といった人称代名詞が指示するところの存在者を指す。このとき、「**私たち**」は必ずしも「あらゆる人」と同義である必要はなく、それゆえに動物説の主張は「あらゆる人は

*¹⁵ その他の動物説論者としては、たとえば Wiggins 1980; Carter 1989; Ayers 1991; McDowell 1997; Mackie 1999; Merricks 2001; Liao 2006; Parfit 2008; Belshaw 2011; Hershenov 2011; Toner 2011; Árnadóttir 2013; Sharpe 2015; Yang 2015; Bailey 2016 を挙げることができる。

*¹⁶ Bailey 2015 が指摘するように、動物説の主張を全称文 (universal sentence) として理解するか、あるいは総称文 (generic sentence) として理解するかについては一定の議論の余地がある (総称文は例外を許すがゆえに、その場合動物説の主張は全称文に比べて弱められる)。ただし、こうした論点は動物説特有のものではなく、Johnston 2016 によれば、人の同一性の議論における身体的基準や心理的基準の立場にも当てはまる論点である (とはいえ実際には、人の存在論上のあらゆる理論にも当てはまるだろう)。

動物である」というものではない。通常、人であること(personhood)にとって本質的だとされる条件とは、合理性、志向性、自己意識などである(Dennett 2017, pp. 289–91)。すると人に該当する候補として、あなたや本稿の著者、ドナルド・トランプ以外にも、たとえば神や天使、高度に発達した人工知能、自己意識を持ったエイリアンなどが考えられるかもしれない。しかし動物説は、人一般についての見解ではないため、こうした一連の存在者が動物であると(大胆にも)論じるわけではない。言い換えれば、「私たちは動物である」と述べることは、「動物ではない人の存在と両立する」(Olson 2007, p. 24)がゆえに、人概念を動物の観点から理解するよう求めるものではない。

第二に、「動物」とは、ホモ・サピエンスという生物種に属する存在者、すなわちヒトという動物(human animal)を指す。ヒトは、チンパンジーやボノボなどとは異なる、その動物に特有の進化論的な歴史と生物学的な情報を持つ。動物説が述べるのは、私たちが動物一般であるということではなく、その他の動物から明確に区別されるようなヒトであるということである。もちろん、「私たちは、偶然にヒトという動物であり、それ以外の動物でもありうる」という見解も広い意味では動物説の一種ではある(Thornton 2016)。しかし実際には、動物説の主要な支持者はみな、「動物」という語で「ヒト」を意味するよう意図する。また、動物が身体(body)とどのような関係にあるのかについては、「身体」という語が何を表すのか明らかではないため——非生物的で人工的な「身体」がありうるかどうかは大変微妙である——あまり意味をなす問いではないとされる(Olson 1997b, pp. 149–53; Olson 2007, pp. 25–6)。

第三に、「である」という繫辞は、**数的同一性(numerical identity)**を指す。つまり、ある動物が存在し、トランプはその動物と数的に同一であるというのが動物説の主張である。逆に述べれば、「私たちは動物である」ということで動物説は、たとえば「私たちは動物に属する」や「私たちは(動物と密接な関係があるために、ある意味では)動物である」と主張したいわけではない。あくまでも、私たちと各々の動物個体の間の通常の意味での数的同一性を主張するのが動物説である。これに対し、第4節以降で紹介される構成主義は、私たちが各動物個体と密接な関係にあることは認めつつも、それらが数的に同一であることは明確に否定する。このことから、動物説と構成主義の間の対立点の一つは、「私たちは各動物個体(と数的に同一)である」という主張の正否にあるとすることができる(「である」という繫辞に対する構成主義の説明(第5.1節)と比較せよ)。

以上から、動物説は次のようにまとめられる。

- (1) 私たちは誰も、ホモ・サピエンスという生物種に属する各動物個体と数的に同一である。ただし、「私たち」は人一般を指すものではない。

この(1)の主張は、動物説の基本的かつ核心的な主張である。ただし、そこから「私たちは所詮、野蛮な動物であり、私の性格や職業、記憶、関心、人間関係は、せいぜいのところ私が持つ表面的な特徴にすぎない」という含意まで読み込む必要はない(Olson 2007, p. 26; Blatti 2018)。あなたやトランプがそうであるように、私たちの多くは実際に意識や合理性を持ち、動物であるということからは導かれないような諸性質を幅広く持つことができる。動物説は、あくまでも「私たちは何であるか」に答える形而上学的な見解であり、

私たちの本性を軽蔑する、または私たちから心理的諸特徴を剥奪するような見解ではない。

以上から、動物説に生じやすい誤解は解消できたように思われる。

2.3 動物と生命

ところで、動物説で中心的な役割を担う「動物」、特に「ヒト」とは、具体的にはどのようなものなのだろうか。実際のところ、この正確な解明は、生物学や動物行動学、動物心理学などの研究成果に多くの部分を負うことになるはずである (Olson 1997b, p. 127–31; Snowdon 2003)。しかしながら、大雑把な形式であれば、動物を特徴づけることは不可能ではない (Olson 2007, pp. 27–9)。オルソンによると、動物に与えられるべき特徴づけのうち最も重要なものは、次のような仕方で**生命 (life)**と深く関わるものである。すなわち、動物は本質的に生物学的な生命を持ち、動物が同一物として持続するのは、その生命が持続するときかつそのときに限る。ここで言われる「生命」とは、動物の複合的な内部機構を維持するための自己組織的な生化学的な出来事を意味する。動物は、呼吸や血液循環、消化、体温調節などを機能させるとともに、代謝に基づき恒常的に新しい分子を生体の構造へと取り入れ不要物を放出する。このおかげで、数的に同一の動物は、異なる時点においても異なる物質的な諸部分から成ることができる。つまり、代謝によるターンオーバー (分子の連続的な分解・合成によって古い細胞を排出し入れ替えること) を経たしても動物が数的に同一のまま持続することができるのは、その動物が恒常的な生命を持ち、内部機構を一定の状態に保つおかげである。水のない湖がもはや湖ではないのと類比的に、生命を欠く動物はもはや動物ではない (Olson 1997b, p. 136; Olson 2003)。私たちを含むあらゆる動物は、その生物学的な生命を獲得した瞬間にこの世界に誕生し、死を迎えると同時に存在しなくなる、すなわち消滅するというわけである (van Inwagen 1990, pp. 142–58; Olson 1997b, pp. 127–8; DeGrazia 2005, ch. 2; Belshaw 2011)。

では、この生命の維持を可能にするものとは何だろうか。かつてオルソンは、その具体的な維持器官として**脳幹 (brainstem)**を挙げていた。彼の言葉を借りれば、「あなたの生命維持機能を司る器官は、主として脳幹であり、脳幹こそがあなたにとって本質的である」ため、「脳幹がなければ、(中略) 生命を持った人体もありえない」 (Olson 1997b, p. 140)。つまり、脳からの信号などの各種働きを可能にするものとして脳幹を維持することは、生命機能の保持、ひいては動物の持続にとって本質的である。他方で、同じ脳に含まれるものでも、**大脳 (cerebrum)**は生命維持にとって必ずしも重要ではない。一般に、「推論や記憶といった高度な心的能力に最も直接的に貢献する器官」 (ibid., p. 9) である大脳は、生命維持を本質的とする動物の持続には関わらない。よって、「大脳が[他の誰かに]移植されたとしても、あなたは自身の大脳とともにあるというわけではない。あなたは単に(中略) 心理的な能力を持つ器官を失っただけのことである」 (ibid., p. 18)。大脳を欠く者以外にも、たとえば脳幹を発達させただけの胎児や、いわゆる遷延性植物状態 (persistent vegetable state) にある患者もまた、意識状態などの心理的な諸特徴を持たないかもしれない。しかし、彼らはみな、生命を持続させている限り私たち動物に含まれる存在者である。

このことから、標準的な動物説論者はしばしば、あなたが心理的な諸特徴を失い、ロック的な意味における人でなくなったとしても、あなたは存在しなくなるわけではないと論じる。これは、私たちが常に人であ

るわけではないということ、そして人という性質は私たちが存在する全段階の一部分しか適用できないということの意味する(Olson 1997b, pp. 29-30; DeGrazia 2005, p. 49)。通常こうした性質は、**段階種性質または段階種概念**(*phase sortal property or concept*)と呼ばれ、「人」は「少年」や「幼虫」などと類比的である^{*17}。たとえばトランプが少年でなくなったからといって彼が消滅するわけではないのと同じように、人という性質に属さなくなるとしても私たちは存在しなくなるわけではない。その代わりに、私たちが常に属するのは、特に脳幹が司る生命維持機能によって特徴づけられるような動物という性質である(私たちがどのような性質に属するかに関する構成主義の説明(第 4.2 節)と比較せよ)。

しかしながら、動物が人と違って生命と深く関わることはたしかに認められうるにせよ、生命と脳幹の間の正確な対応を過度に強調することには疑義が呈されうる。なぜならば、かつての脳幹を失うとしても、それと入れ替わるように新たな脳幹を(移植によって)獲得した場合、その動物が同一物として持続することは妨げられないかもしれないからである(Tzinman 2016)。こうした指摘を受け、近年になってオルソンは、動物(特にヒト)の生命の持続を脳幹に帰することを事実上撤回した(Olson 2016)。この新たな見解によると、脳幹はヒトの生命の維持を司る唯一の器官というわけではないばかりか(視床下部や脊髄も生命維持機能に貢献する)、むしろ生命はいかなる種類の中核的管理も必要とせず、脳の統合的機能がなくとも維持されるものである(cf. Hershenov 2002; Hershenov 2008)。このため、脳幹を破壊したとしても、生命機能は問題なく保持され、動物であるヒトもまた問題なく持続しうる。よって、動物説論者は、生命活動を可能にする器官を特定することなく、動物の生命について語ることができるとオルソンは論じる^{*18}。

以上のオルソンの見解からわかるのは、中核的な管理を必要としないような生命維持機能こそが、私たちと同一視される各々の動物の通時的同一性にとって本質的だということである。オルソンによる動物説が、第 1 節で見た新ロック主義——それは人の同一性において心理的基準を採用する見解だった——と衝突するのはいまや明白である。というのも、「ヒトが時間を通じて持続することによって、心理的な継続性は必要でも十分でもない」(Olson 1997b, p. 17)からである(cf. Snowdon 2014b, p. 113)。他方で、第 2.1 節で見たように、動物の持続が生命維持に基づくことは、すでにロックによって「人間(Man)の同一性」として示唆されていた事柄であった。この意味で、動物説は私たちをヒトと同定したうえで、議論の焦点を人の同一性からヒトの同一性へ移す立場であると言える。ただし、動物の持続に関する議論は第 2.5 節で再び立ち戻る。

^{*17} 「種」という訳語は、鈴木 2008 に従う。なお、動物説内部でも、Snowdon 2014b, p. 73 によれば、「人」は種性質を表すものですらなく機能的役割を担う名詞にすぎないとされる。また、人を段階種性質とみなす見解は、Parfit 2008; Markosian 2010 でも示唆されている。

^{*18} オルソンの考えでは、私たちヒトが誕生するのは、胎芽またはヒト胚(embryo)が存在し始める時点、すなわち「受精後 14 日から 17 日」(Olson 1997b, p. 91)だとされていた(なお、異なる形而上学な根拠ではあるものの、類似した見解は Smith and Brogaard 2003 でも提案されている)。だが、脳幹の形成が通常受精後 40 日以降であることに鑑みると、Hershenov 2002 が指摘する通り、オルソンの考えでは脳幹なき胎芽は私たちヒトではないはずである。よって、脳幹という一つの器官の存在と私たちヒトの存在を過度に結び付けることには発生学の観点からも疑問を呈することができる。なお、DeGrazia 2012, pp. 23-4 は、特定の生物学的知見に基づき、私たちヒトが受精直後に誕生する可能性を示唆している。

2.4 なぜ私たちは動物なのか：思考する動物論証と動物の祖先論証

ここまで我々は、オルソンの議論を中心に動物説がどのような内実を伴う立場であるかを見てきた。では、動物説はどのような議論によって根拠づけられるのだろうか。本節と次節では、私たちが動物であることを擁護する論証を二つだけ概観することにしよう。

動物説を支持する論証の中でも最も強力な議論として知られるのは、**思考する動物論証** (*thinking animal argument*) である^{*19}。オルソンによれば、思考する動物論証は、「動物説の主たる支持根拠」であり、「もしそれが失敗しているならば、(中略) 私たちが動物であるということを支持する理由が存在するということを理解するのが困難となる」(Olson 2004, p. 267)。この論証は様々な形で提起されてきたが(Carter 1989; Snowdon 1990; Ayers 1991, pp. 283–4; McDowell 1997; Olson 1997b, pp. 100–9; van Inwagen 1997, p. 312; Merricks 2001, pp. 85–6; Olson 2003)、ここではあるバージョンの論証を、「私たち」の具体例であるトランプと彼に対応する動物 *T* に適用してみよう。

- (2) 現在トランプが立っている絨毯の上には、ある(ヒトという)動物 *T* が存在する。
- (3) 現在トランプが立っている絨毯の上に存在するその動物 *T* は、思考している。
- (4) トランプは、現在トランプが立っている絨毯の上で思考する唯一の存在者である。
- (5) したがって、現在トランプが立っている絨毯の上に存在するその動物 *T* は、トランプである。

最後の(5)の結論は動物説による(1)に相当する。以下では、(2)から(4)の各前提のもっともらしさを確認することにしよう(Olson 2003; Olson 2007, pp. 29–37)。

まず、(2)は受け入れるに値する前提だと思われる。トランプの立っている絨毯の上に存在し、彼と同じ空間的位置を占める存在者がヒトの格好の一例ではないとしたら、いったいそれは何であろうか。一連のヒトがトランプを含む「私たち」と同じ空間的位置を占めることを否定する者がいるとすれば、彼女は、一般にヒトが存在することを否定するだろう。そして、もしヒトが存在しないとすれば、その他の生物種の存在を認めることもまた難しくなり、その結果(2)を否定する者は、最終的にいかなる動物の存在も拒否せざるをえないだろう。「もし動物が存在しないとすれば、地球上に存するもののうちで、私たちでありうるような存在者はあまり残っていない」(Olson 2007, p. 31)のだとすると、(2)を否定することはあまりにも犠牲の大きい選択である。よって、ヒトの存在が正しく認められる限り(2)は正しい。実際、第4節以降で見る構成主義を含め、動物説と対立する理論においてもヒトの存在は問題なく支持される^{*20}。

次に、(3)もまた受け入れるに足る前提だと言えるだろう。というのも、トランプと同じ空間的位置を占める特定のヒトは明らかに、思考するのに十分な物理的基盤として脳を備えているからである。それにもかか

^{*19} 変形版や亜種も含めれば、思考する動物論証に対しては、これまで様々な別名が与えられてきた。たとえば、Shoemaker 1999 の「一つ余計な心の反論」、Campbell 2006 の「二つの人生の反論」、Parfit 2012 の「一つ余計な思考者の問題」などである。

^{*20} もちろん、Olson 2003; Olson 2007, pp. 30–1 が指摘する通り、たとえば観念論やメレオロジカルな本質主義などの極端な立場に立つのであれば(2)を拒否できる。(2)に対するその他の批判としては、Zimmerman 2008 を見よ。

わらずこの前提を否定しようとするれば、当のヒトが思考できないとする根拠を示さねばならない。おそらくその根拠とは、ヒトという動物一般は思考することができない、というものだと考えられる。しかし、チンパンジーやイルカなどのヒト以外の動物が知覚や欲求などの心理的能力を持つのだとすると、ヒトが脳という中枢神経系を持つにもかかわらず思考しえないというのは非常に奇妙である。したがって、ヒトが脳を使って思考することを妨げるものが何であるかが正しく説明されない限り、(3)もまたもっともらしい(ヒトの思考不可能性に対するシューメイカーの説明(第4.5節と第5.2節)と比較せよ)。

最後に、(4)もまたやはり否定しがたい前提である。なぜならば、この前提を否定すると、厄介な問題がいくつか生じてしまうからである。いま(2)と(3)が正しく、かつトランプが思考しながら存在しているのだとしよう。このとき、トランプが問題の絨毯上で思考する唯一の存在者であることを否定すると、どうなるだろうか。それは明らかに、動物 *T* がトランプとは別の思考者として存在するということを含意する。つまり、「一人」しか立っていないと通常考えられる問題の絨毯には、驚くべきことに(少なくとも)二つの思考者、つまりトランプと動物 *T* が同時に存在しているという事態、すなわち**混雑した (overcrowding)** 事態が導かれる。

混雑した事態を認めることは、第一に認識上の問題(や言語上の問題)を惹起するだろう(Zimmerman 2003; Olson 2004)。たとえば、トランプの占める空間的位置に存在する二つの思考者のうち、自身と数的に同一であるのがどちらの思考者であるかをトランプはいかにして知りうるのだろうか。いまトランプが(混雑した事態を受け入れて)自身は動物 *T* と同一ではないと信じる時、トランプと *T* はまったく同じように思考するため、*T* もまた自身が *T* と同一ではないと信じることとなる。しかし、*T* のそうした信念は明らかに偽である。そのため、*T* と等しい認識的証拠や根拠を持つと考えられるトランプもまた、自身は *T* と同一ではないと信じる証拠や根拠を欠き、そのことを知りえないこととなる。つまり、トランプは *T* と同一ではないという事実が実際に成立する場合でも、トランプは *T* と等しい認識的状况にあるためにその事実を決して知りえず、彼は自身と数的に同一であるのがどちらの思考者であるかを知りえないということが導かれる。この認識上の帰結は、(4)を否定してトランプと *T* を二つの思考者として区別する者にとって(不可知論に与する場合を除けば)受け入れがたいものだろう^{*21}。これと類比的に、二つの思考者が存在する場合に一人称代名詞「私」が発話されると、そこで用いられる「私」はトランプと動物 *T* のどちらの思考者を指示し、さらに一人称的な言明一般はどのようにして真となるのだろうか。混雑した事態は、トランプと動物 *T* という二人の思考者(発話者)の存在を認めるためにこうした言語上の問題も招いてしまう^{*22}。

第二に、混雑した事態は**一人余計な人の問題 (too many persons problem)** も引き起こす(Snowdon 1990; Parfit 2012)。トランプと同じように思考する動物 *T* は、思考以外の心理的特徴、たとえば合理性や志向性、自己意識などをもトランプと共有するように見える。そうだとすると、このことは *T* がまさしく「人」と

^{*21} ただし、Brueckner and Buford 2009 によれば、思考する動物論証には(信頼性主義などの知識の外在主義によって論駁されうる)誤った認識的原理が前提されており、この前提を排除すれば、認識上の問題は生じないとされる。この指摘に対する動物説の側からの応答については、Yang 2013 を見よ。

^{*22} ただし、Parfit 2012 によれば、人称代名詞の指示は系統的に多義的であると考えれば、言語上の問題は解決可能だとされる。この指摘に対するオルソンの応答については、Olson 2015b を見よ。また、Noonan 1998; Kovacs 2016 によれば、人称代名詞の指示を改定すれば、言語上および認識上の問題は解決可能だとされる。この指摘に対するオルソンの応答については、Olson 2007, pp. 37–9 を見よ。

みなすにふさわしいということを意味する。しかし、もし *T* が人であるとする、トランプが占める空間的位置には二人の人が存在することとなる。これはあまりにも「狂気じみた」(Olson 2003, p. 330) 帰結である。他方で、*T* は人でないと考えられる場合、心理的な諸特徴においてトランプから識別できないにもかかわらず *T* が人でないとする根拠を新たに示さねばならない(動物が人から区別される根拠に対する構成主義の説明(第 4.2 節と第 5.3 節)と比較せよ)。したがって、混雑した事態をめぐる一連の諸問題が適切に解決されない限り、(4)は受け入れるのが望ましい前提である。つまり、トランプは現在彼が立っている絨毯の上で思考する唯一の存在者であり、そこでは競合する二つの思考者が存在するわけではないと考えるべきである(一人余計な思考者に対するベーカーの説明(第 5.2 節)と比較せよ)。

以上から、(2)から(4)の各前提の拒否は、反直観的な帰結を導くか、または厄介な問題を招いてしまうことが明らかとなった。このため、それら前提はすべてもっともらしい。論証の結論である(5)は、これら諸前提から導かれる。言い換えれば、現在トランプが立っている絨毯に存在する動物 *T* は、トランプに他ならないということが帰結する。これは動物説の主張である。したがって、思考する動物論証内の拒否しがたい諸前提から自然に導かれる見解こそが、動物説である。

現在に至るまで、動物説論者の依って立つ最大の基礎が思考する動物論証であったことは疑いえない。一方で近年、動物説を支持するさらなる論証も登場している。そのうちの一つは、ブラッティによって提出された**動物の祖先論証**(*animal ancestor argument*)と呼ばれるものである(Blatti 2012; Snowdon 2014b, pp. 108–9; Bailey 2016; Blatti 2018)。この論証は、背理法に基づいて次のように再構成することができる。

- (6) 動物説は偽である。つまり、私たちは動物ではない。
- (7) (6)より、私たちの祖先もまた動物ではない。
- (8) 進化論によると、私たちの祖先にはチンパンジーが含まれる。
- (9) (7)と(8)より、チンパンジーは動物ではない。
- (10) しかし、チンパンジーは動物である。
- (11) ゆえに、(6)が偽である。つまり、私たちは動物である。

いま、仮に動物説が偽であると仮定すると、私たちは動物ではなく、さらに私たちの両親や祖父母をはじめとするあらゆる祖先もまた動物ではないことが導かれる。しかしそうすると、動物説の否定は、進化論の否定——正確には、進化論を私たちへ適用することの否定——を含意してしまうように思われる。というのも、いまの仮定に従うと、私たちの祖先をどれほど遡ったとしても、そこに動物は一切含まれないことになってしまうが、たとえばチンパンジーは明らかに私たちの祖先に含まれるからである。よって、「私たちは、主として自然選択によってもたらされた進化の産物である」という見解が進化論の持つ含意だとすると、動物説を拒否する者はこの見解を進化論と一緒に拒否せねばならない。これはあまりにも手痛い代償である。この代償を避けるには、私たちは動物ではないという仮定に問題があったと考えるべきである。したがって、動物説は正しい。

この論証で特に論争の余地があるのは(7)の正否だと思われる。いま仮に(6)が真であるとしても、(7)は偽であると想定してみよう。つまり、私たちは動物ではないが、私たちの祖先は動物であるとしよう。このように想定する論者は、私たちが動物から「進化した」すなわち創発した(emergent)存在者だと論じるはずである(Lowe 1996, pp. 47–8; Baker 2007, pp. 237–9; Baker 2013b, p. 149)。たしかに、自然選択に基づく進化のプロセスは、動物でも生物でもない存在者として新たに人を生み出すようなものではない。しかし、どこかの時点で意識や一人称観点などの心理的な諸特徴が創発することによって、私たちの直近の祖先は——遠い動物の祖先とは対照的に——人へと「進化」したと考えることができる。よって、私たちが動物でないとしても私たちの祖先が動物であることは妨げられず、(6)から(7)の導出は、私たちの誕生が創発によるものだという可能性を不当に無視するものかもしれない。

しかし、ブラッティによれば、心理的な能力の獲得は、自然環境による「選択圧への適応」(Blatti 2012, p. 687)によるものとして理解することができ、必ずしも創発性へと結び付ける必要はない。もちろん心理的な諸特徴の創発に基づく人の創発性の可能性はまったくないわけではないが、少なくともそのあり方と根拠が適切に示されない限り、創発に頼る説明はあまり見込みのないものだろう。よって、動物から人への「進化」の説明が疑わしい以上、(7)は真と考えるべきである^{*23}。

動物説を支持する論証は他にも数多く提出されてきたが(Bailey 2016; Snowdon 1990; Snowdon 2014b, ch. 4)、現在まで少なくない議論を提起してきたのは思考する動物論証と動物の祖先論証の少なくとも二つである。

2.5 動物説の多様性

あらゆる理論は発展と同時に細分化する。それは動物説でも例外ではない。(1)が様々な論証によって擁護される動物説の基本的な主張であるとすれば、それは同時にミニマルな主張でもある。というのも、「動物」をどのように理解するかに応じて、動物説が持つ内実は大きく異なってしまうからである。ここでは、二つの観点から動物説の多様性を見ることにしよう。

一つの観点は、私たちが本質的に(essentially)動物であるかどうかに関わる。私たちが本質的に動物であるとすれば、動物であるという性質は、私たちが存在する限り常に・必然的に例化するようなものである。このことは、どの時点や世界を見渡したとしても、動物ではないようなランプなど存在しないということを含意する。しかし、動物説それ自体は、こうした本質主義に必ずしもコミットするわけではない。というのも、(1)にある通りに「私たちは動物(特にヒト)と数的に同一である」と主張することは、「あらゆる動物(特にヒト)は本質的に動物に属する」という主張から基本的に独立だからである。このことから、動物説内部に

^{*23} ただし、動物の祖先論証に反対すると思われる多くの論者(たとえば構成主義者や二元論者)はおそらく、次のロウの言葉を大きな励みとするだろう(ただし、それは動物の祖先論証に向けられたものではない)。すなわち、「心的なものは生物に対する環境の選択圧へ貢献するために生物学的な基礎を持たねばならないという著しく不当な想定を置かない限りは、(中略)心的なものの非生物学的な見解が進化論と何らかの形で衝突すると主張することなど到底できない」(Lowe 2012, p. 64)。動物の祖先論証に対するその他の批判的検討については、Daly and Liggins 2013; Gillett 2013 を見よ。

は、本質主義の正否を分水嶺として複数の見解がありうることがわかる。とはいえ、オルソンが指摘する通り、「私自身[すなわちオルソン]の見解、そして動物説論者であれそうでない者であれ、ほとんどの哲学者の見解では、動物は本質的に動物である」(Olson 2007, p. 27)。したがって、原則的には(1)の主張を動物の本質主義へと結び付けるかどうかの選択肢は開かれているものの、現実としては、動物説は「私たちは本質的に動物である」という主張に自然に紐づけられているように思われる^{*24}。

他方でもう一つの観点は、動物説の実際的な多様性を裏付けるものである。それは、**動物の持続条件**すなわち動物が持つ通時的な同一性の条件に関わる。先の第2.3節で見たように、オルソンによれば、私たち動物が通時的に同一であるのは、その生命維持機能が持続するときかつそのときに限るのだった。これによると、生命維持機能が失われる(すなわち動物が死ぬ)ことと、私たち動物が存在しなくなることの間には不可分の結び付きが存在する(Olson 1997b, pp. 131–8)。しかしながら、同じ動物説論者であるスノードンが注意を促すように、「人の持続と同じように、動物の持続については明らかに不一致が存在する」(Snowdon 2014a, p. 172)。生命維持を重視する持続条件は——標準的な動物説が認めるもののだとはいえ——(1)から導かれるものではなく、あくまでも(1)に付加的に主張されるものである。上記の本質主義と同様に、私たち動物の通時的同一性がどのようなものに存するかは、あらゆる動物説論者にとって選択の余地がある問いである。

これまで動物の持続条件については、生命の維持に依拠する標準的なものを除けば、少なくとも二つの選択肢が提示されてきた^{*25}。一方の見解によれば、私たち動物の通時的同一性は、生命に適切な構造をもって組織化された一定の諸部分の保持にある(Ayers 1991, pp. 224–5; Feldman 1992, pp. 89–105; Carter 1999; Mackie 1999; Snowdon 2014b, pp. 114–20)。この条件に従うと、私たちは、生命を保持する動物としてだけでなく、生命機能が停止した仮死状態の動物や、生命機能を失った死んだ動物としても存在し続けることができる。私たちが完全に存在しなくなるのは、生命に適切な構造を持った身体が十分に破壊される(たとえば私たちの諸部分が塵芥となる)ときのみである。このため、死は私たち動物の存在の終わりであるという標準的な動物説の見解——これはしばしば**終焉テーゼ(Termination Thesis)**と呼ばれる——は偽である^{*26}。実際、「この動物はもう死んでいる」という言い回しは、「動物」と「死んでいる」を文字通りに理解したとしても、それほど奇妙な響きを持たない。また、ある植物が生命を失い枯死したとしても、私たちは普通、その植物が死の瞬間に存在しなくなったとは思えない。植物に対するこうした態度を動物に対しても適用するのは決して不自然ではないだろう。したがって、終焉テーゼを拒否するこの見解によれば、私たち動物は、仮に生命を失い死んだとしても存在し続けることができる。

^{*24} ただし、本質主義に必ずしもコミットしない動物説は、Merricks 2001, p. 86; Hershenov 2008 で簡潔ながらほのめかされている。また、動物という性質が個々の動物にとって必ずしも本質的ではないという見解は、Nichols 2010 で表明されている。

^{*25} その他の見解、たとえば、私たちの通時的同一性は生物的継続性または心理的継続性の保持にあるとする見解や、私たちの通時的同一性の条件などどこにも存在しないとする見解(いわゆる単純説)については、順に Langford 2014; Merricks 1998 を見よ(ただし、前者は必ずしも動物説を支持するわけではない)。なお、単純説については注46を見よ。

^{*26} 「終焉テーゼ」という訳語は、鈴木 2011 に従う。

他方のもう一つの見解によると、私たち動物の通時的同一性は、記憶や意識などに基づく何らかの心理的な諸特徴の保持と強く関係する(Wiggins 1980, ch. 6; McDowell 1997; Parfit 2008; Sharpe 2015)。換言すれば、生命の維持にくわえて私たちの持続にとって重要であるのは、心理的な諸特徴の保持である。とりわけ、この見解を最初に表明したデイヴィッド・ウィギンズによると、ある者 x が人であるということは、 x が次の仕方で特徴づけられる動物種すなわちヒトに属するということに他ならない(Wiggins 1980, p. 171)。すなわち、その動物種とは、それに属する典型例(*typical members*)が、知覚や感覚、記憶を持ち、さらに自身を知覚し感覚するものと理解するような合理性と意識を持った存在者であるような種である^{*27}。つまり、第 2.1 節で見たロックの説明とは対照的に、私たちが人であるということは私たちが動物としてのヒトでもあるということを含意し、人であることにとって本質的な心理的な諸特徴はヒトであるという動物に関する諸特徴の一部に含まれている。ウィギンズの言い回しを借りれば、人という概念がヒトという概念に依存するという意味で、両者は「調和的(*concordant*)」であり、両概念の間には「統合性(*consilience*)」(Wiggins 1996, p. 248)が元々存在することを認めねばならない。その結果、「人(*person*)」ということで、**特定の種類の動物(*a certain sort of animal*)**が意味される」(Wiggins 1980, p. 187)ため、私たちは本質的に心理的な人であるとともに生物学的なヒトであることが導かれる。

また、この見解と比較的類似したものとしては近年、いわゆる**質料形相論(*hylomorphism*)**と動物説を組み合わせた見解も登場している(Toner 2011; Hershenov 2011)。これによると、私たちは、質料(素材)としての身体と形相(本質)としての魂から成る質料形相論的な実体としてのヒトである。そして私たちヒトの通時的同一性の成立には、心理的な能力を担う魂の活動が不可欠であると考えられる。こうした見解は、ヒトの本質である形相が心理的なものであることに注意を促すために、「心理学は人[または私たち]の同一性とはまったく無関係である」(Olson 1997a, p. 97)と考える標準的な動物説とはまったく異なる形而上学的基盤を持つ^{*28}。よって、質料形相論的な動物説は、私たち人の同一性を心理的な側面から理解する新ロック主義へと部分的に接近する——その結果、第 4 節以降で見る構成主義にも接近する——ことになるだろう。

以上を要約すると次のようになる。すなわち、私たちが本質的に動物であるかどうかについては、多くの動物説論者の意見は一致するものの、私たちの持続条件がどのようなものであるかについては明らかな不一致が存在する。オルソンをはじめとする標準的な動物説論者によると、動物の持続条件は生命の保

^{*27} こうした特徴づけの他に、ウィギンズは、「解釈の主体であると同時に解釈の対象でもあるような存在者」という点も人の特徴づけに加えている(Wiggins 1980, p. 222; Wiggins 1996, p. 245)。これによると、 x が人であることは、他者を自身と似たものとして理解し、また他者からもそのように理解されるような存在者を典型例とする動物種すなわちヒトに x が属するということによって説明される。ただし、後の述懐の中でウィギンズは、私たちとヒトでない事物の間に解釈が成立する可能性を排除しなくなったため、自身の主張を「人について私たちが持つ**唯一満足のいく典型例**は、ヒトである」(Wiggins 2016, p. 96)と慎重に述べ直している。とはいえ、「人という概念とヒトという概念のどちらか一方だけを私たち自身から切り離すことはできない」(*ibid.*)として、かつての Wiggins 1980 における基本的立場からそれほど変わったわけではないと結論づける。

^{*28} 彼らの質料形相論の理解には、分析的トマス主義(*analytic Thomism*)からの影響を認めることができる。トマス主義的な質料形相論の批判的検討については、Olson 2007, pp. 171–6 を見よ。なお、質料形相論それ自体は、動物説以外の見解とも組み合わせることができる。たとえば、質料形相論的な二元論については Oderberg 2007, ch. 10 を、質料形相論的な構成主義については第 4.5 節を見よ。

持にあるのに対し、その他の見解によれば、私たちは「死んだ動物」でありうる、または私たちは「心理的な動物」でなければならない。よって、動物説内部の多様性は主として、生命や死、心理的な諸特徴との関わりの中で動物の持続条件をどのように考えるかにあることがわかる。

3 動物説の問題と応答

本節からは、動物説に対して提起されてきた主な問題とその応答を簡潔に見ていくことにしよう。取り上げるのは(少なくとも)三つの問題である。ただし、特に断りがなければ、以下では「動物説」という語で主にオルソンによる標準的な動物説を念頭に置くこととする。

3.1 移植に関する直観問題

動物説に対し最も頻繁に取り上げられてきた問題は、**移植に関する直観問題** (*transplant intuition problem*) である。それは、次のような反論として提起される (Noonan 2003, p. 205; Baker 2000, pp. 123–4; Johnston 2007; Shoemaker 2008; Parfit 2012; Duncan 2014)。

- (12) 動物説によれば、トランプはある動物 T と数的に同一である。しかし、トランプの脳(特に大脳)を移植するケースの場合、トランプの脳を欠いた動物 T がトランプであるというのは奇妙な帰結であるように見える。

たとえば、トランプの大脳が彼の身体から切り離され、事前に大脳を取り出されていた別の身体へと移植されたとする。そのとき、術後に目を覚ます人は、術前のトランプと(記憶や自己意識などにおいて)心理的に継続しているものとしよう。このシナリオは、現代医学の進歩を踏まえれば決して不可能なものではない。さて、このような想定のもとでは、元の動物 T とトランプの関係は術後どうなっているだろうか。大脳を取り出されたその動物は、意識などの心理的機能を失うものの、代謝や消化といった生命維持に必要なほとんどの機能を継続させている。それゆえ、動物説に従えば、トランプは元の動物 T との同一性を依然として保持する。しかし、第 1 節で見たように、私たちの直観によれば、トランプの同一性は心理的なものに存するように思われる。このため、術後のトランプは T から離れ、彼の脳が移植された身体を持つようになるはずである。つまり動物説は、直観に反して、トランプが自身の大脳または心と同じ運命を辿ることを拒否してしまうのである。

ここで注意すべきなのは、いま問題とされる直観が、**全脳**ではなく**大脳**の移植に関するものだということである。その理由は、ヴァンインワーゲンをはじめとする一部の動物説論者が、私たち動物(ヒト)は脳のサイズにまで切り詰められうるという可能性を受け入れているからである (van Inwagen 1990, p. 45; Merricks 2001, p. 52)。つまり、摘出された全脳は動物でありうる(と同時に、全脳を摘出された動物は生命を失う)ために、動物説論者は必ずしも「トランプは自身の全脳と同じ運命を辿る」と述べることを妨げられない

(Olson 1997b, pp. 44–6)。よって、全脳移植の直観は、大脳移植の直観と異なり動物説への有効な反論となるわけではないと考えられてきた。しかしながら、第 2.3 節で見たように、近年のオルソンの考えでは、生命の維持は全脳の一部である脳幹だけに依拠するわけではなく、全脳を摘出されたとしても動物は生命を失うわけではないとみなされる。このため、「全脳か大脳か」はもはやそれほど強調に値する論点というわけではないかもしれない。とはいえ、以下では、簡便のため全脳ではなく大脳の移植の直観に制限して見ていくことにしたい^{*29}。

移植に関する直観問題に対して、標準的な動物説はどのように応答するだろうか^{*30}。最もシンプルな応答は、移植に関する直観を端的に棄却するものである。たとえば、ドゥグラツィアによれば、トランプは、脳移植によって大脳を失ったとしても、あるいは全脳死 (whole-brain death) を経験したとしても (さらにその身体が人工的に維持される場合でも)、統合された一個体として生命という機能が恒久的に失われないう限りは、同一物として持続し続ける (DeGrazia 2005, ch. 4)^{*31}。たしかに、多くの者はトランプの大脳と心を持つような者こそがトランプであると考ええる。しかし、私たちの持続条件が同じ動物であることにあると認める動物説論者は、この直観および新ロック主義を拒否せねばならない。つまり、術後のトランプは、脳を失った元の動物の方と数的に同一であると考えるべきである。

類似した応答は、その他の動物説論者によっても認められる。スノードンによれば、私たちが大脳と運命をともにするという直観は「御しがたくはあるが、逸脱した直観」(Snowdon 2014b, p. 209) である。この直観が引き出されてしまうのは、大脳移植の事例を紹介する際に、心理的な継続性が往々にして強調されるからである。しかし、こうした強調は不当にも、「何らかの判断を下さねばならないと感じる状況では、当の人は当の脳と一緒にあるのだという判断を選択する傾向性」を暗に形成する。このため、移植の直観は信頼できるものではない。「私たちの反応がどういったものになるかは、脳移植の物語を紹介する際の力点がどこにあるかに影響されてしまう」(ibid., p. 227) のである。

オルソンもまた、基本的には移植の直観を認めない戦略を採用する。オルソンによれば、トランプは「肝臓を失うのと同じ仕方で、単に思考を担う器官[大脳]を失ったにすぎない」(Olson 1997b, p. 44)。よって、術後のトランプは、仮に私たちの常識から逸脱するとしても、大脳を失った元の動物の方と数的に同一で

^{*29} しかしながら、Olson 2016 も問題提起するように、もし全脳を摘出されたトランプだけでなく摘出されたトランプの全脳もまた動物だとすると、いわば動物の分裂問題が生じてしまう——全脳移植の瞬間に、一つの動物であるトランプが二つの動物に分裂するようになるからである。これは明らかに、新ロック主義の最大の問題と考えられた**分裂の問題** (fission problem) と類比的だろう (Nozick 1981, ch. 1; Parfit 1984, chs. 10, 12; Noonan 2003, ch. 9)。この問題に対するオルソンの応答は非常に歯切れの悪いものである。

^{*30} 第 2.5 節で見た一部の非標準的な動物説は、移植に関する直観問題を容易に解決することができる。というのも、私たちヒトの持続条件が心理的なものと関係するのであれば、新ロック主義と同様に、トランプの脳を欠いた動物がトランプ自身であると認める必要に迫られないからである。この「心理的な動物」の見解の批判的検討については、Olson 1997b, pp. 109–11 を見よ。

^{*31} ドゥグラツィアによると、このことは、全脳死は必ずしも私たちヒトの死ではないという脳死判定をめぐる生命倫理学上の帰結と強く関連づけられる。そうした点で、ヒトの死とその他の動物の死の間に明確な境界は存在しないとされ、さらに DeGrazia 2016 では、死はヒトと同じようにヒト以外の動物にも (程度の差こそあれ) 害をもたらすと考えられる (DeGrazia 2002b からわかるように、ドゥグラツィアは動物倫理学の第一人者としてもよく知られる)。なお、生命倫理学上のいわゆる「パーソン論」と動物説の関わり概観については、有馬 2009; 江口 2014 が助けとなる。

ある。こうした主張はたしかに心理的継続性を重視する直観に反するものの、その直観があまり当てにならないことは次の例によって示すことができる (Snowdon 2014b, p. 234; Olson 2018a)。たとえば、あなたは脳を他の健康の人の脳と入れ替えないと死んでしまう病にかかっている。たしかに、脳を入れ替える手術を受けると、あなたに備わるあらゆる心理的な特徴 (記憶や好みなど) は破壊される。しかし、臓器提供者の脳が移植されるおかげで、あなたは (大きな犠牲を伴うにせよ) あなた自身が救われると言えるはずである。少なくとも、脳を入れ替える手術を経ても、あなたは提供された脳を新しく獲得したにすぎず、臓器提供者があなたの身体を占有したわけではないと考えることはそこまで不自然ではない。よって、あなたが自身の大腦または心と同じ運命を辿るという直観は、必ずしも信頼できるというわけではない。

ただし、オルソンは移植に関する直観が生まれる原因を特定することで、動物説の応答の反直観性を和らげることを試みる (Olson 1997b, pp. 52–70)。彼によれば、トランプの脳が移植された身体はたしかに、トランプの記憶や自己意識を持つような動物 A である。その意味においては、A はトランプと心理的に継続しており、さらにトランプが (自身に対して寄せるのと同程度に) 実践的な関心——これには自己への配慮、自己理解、期待などが含まれる——を寄せるのもこの A に対してであろう。しかし、そのことはトランプが A と同一であることを含意しない。なぜならば、心理的継続性に基づく生存においては、数的同一性はもはや重要ではないからである。私たちの多くは、自身の同一性が心理的な継続性と厳密に対応し、さらに自身の同一性こそが実践的に重要であると考えがゆえに、しばしばトランプは A と同一であると結論づけてしまう。だが、かつてデレク・パーフィットが論じたように、ある人の実践的な関心はその人と数的に同一の人に対するものである必要はなく、実践的に重要な心理的継続性は数的同一性と必ずしも合致するわけではない (Parfit 1984, ch. 12)。こうした見解を積極的に援用することで、オルソンは次のように論じる。すなわち、トランプの記憶や自己意識を持つような動物 A は、いわば**パーフィット的な生存者 (Parfitian survivor)**、すなわちトランプと心理的に継続し実践的に重要な存在者であるという意味で彼と同じ人 (same person) ではあるが、彼と数的に同一ではないような人物である。したがって、「術後のトランプは、元々の身体から離れ、術前のトランプと心理的に継続する別の身体の主である」という脳移植の直観は、トランプと同じ人であるようなパーフィット的な生存者を特定するには役立つにせよ、彼と数的に同一の存在者を特定することには役立たないのである^{*32}。

このように、オルソンの応答は、数的同一性と同じ人であることを厳密に区別したうえで、脳移植に関する直観が私たちの数的同一性に関するものではないと示そうとするものである。しかし、この戦略が移植に関する直観問題を本当に解決できているかについては当然のことながら異論がありうるだろう。というのも、伝統的かつ支配的な見解によれば、「実践的な関心の関係は、数的同一性と心理的な継続性の両方に対応するとされ、あなたがあることに責任を持つのは、当時のあなた自身がそれを行ったときに限り、あなたが当時のあなたと心理的に継続するときに限る」 (Olson 1997b, p. 71) とみなされるからである。オルソンの応答は、脳移植に関する直観の有効性を和らげる代わりに、「同一性は (心理的継続性と違い) 実践的に重要ではない」という問題含みのテーゼを受け入れてしまう。これがどれほどの理論的コストとなる

^{*32} このために、反動物説に立つ Parfit 2012 は、動物説が正しくないのが惜しいくらいであると後になって漏らしている。
なお、「パーフィット的な生存者」という名称は、Noonan 2003, p. 198 による。

か(またはならないか)については、さらなる検討が必要である^{*33}。

3.2 思考する脳問題と残存する人の問題

続いて、脳の存在と密接に関連するもう一つの問題として、思考する脳問題(*thinking brain problem*)を取り上げることにしよう。これは、「脳移植のケースにおける動物説の反直観的な帰結よりもずっと深刻」(Olson 2007, p. 216)な問題だとされ、次のような問題として提起される(Lowe 2001; Parfit 2012; Madden 2016)^{*34}。

- (13) 動物説によれば、トランプと数的に同一であるような動物 *T* は思考する。しかし、トランプの脳もまた思考するのだとすると、まったく同じように思考する *T* とトランプの脳という二人の思考者が存在することになるように思われる。

一見して明らかであるように、思考する脳問題は、先に動物説を擁護するために論じられた「思考する動物論証」とパラレルな構造を持つ問題である。その前提と結論は次のようにまとめられる。

- (14) 現在トランプが立っている絨毯の上には、ある脳が存在する。
 (15) 現在トランプが立っている絨毯の上に存在するその脳は、思考している。
 (16) トランプは、現在トランプが立っている絨毯の上で思考する唯一の存在者である。
 (17) したがって、現在トランプが立っている絨毯の上に存在するその脳は、トランプである。

思考する脳問題が深刻であるのは、思考する動物論証の強力さがそのままこの問題の強力さへと結び付いてしまうからである。現在トランプが立っている絨毯の上に動物 *T* が存在することを認めるのであれば、(14)も自然に認めねばならない。同様に、現在トランプが立っている絨毯の上にいる *T* が思考することを認めるのであれば、(15)も認められてしかるべきである。(16)は思考する動物論証における(4)とまったく同じ前提である。よって、動物説論者は(17)の結論を認めねばならない。しかし、トランプの脳は *T* の真部分であり、明らかにそれは *T* と数的に同一ではない。よって、問題の絨毯の上には動物 *T* とトランプの脳という二つの思考者が存在することになる——こうした混雑した事態は、思考する動物論証が引き起こした問

^{*33} オルソンの応答の批判的検討については、Noonan 2003, ch. 11; D. Shoemaker 2016 を見よ。なお、実践的な関心が私たち(または人)の数的同一性とどのような関係にあるのかについては、動物説の正否とは独立に数多くの議論がある。両者を緊密に結びつける見解については、Unger 1990, ch. 7; Noonan 2003, ch. 9 を見よ。他方で、人の数的同一性という形而上学的事実を実践的関心から切り離す見解については、Shoemaker 1970; D. Shoemaker 2007 を見よ。なお、標準的な動物説論者の DeGrazia 2005, p. 63 は、オルソンと類似した論点を提出するものの、*ibid.*, ch. 3 では、実践的関心を担保するものとして物語的な同一性(*narrative identity*)に注目している。

^{*34} 思考する脳問題は、いわゆる思考する部分問題(*thinking parts problem*)や対立候補問題(*rival-candidates problem*)の一種または変種である。これらの問題の提起については、Burke 2003; Robinson 2006; Árnadóttir 2013 を見よ。

題とまったく同様の諸問題を引き起こすだろう。

これと多かれ少なかれ類似した問題は、次のような事例においても生じる(Johnston 2007; Johnston 2016)。いまトランプから大腦を取り出す手術を行い、それを特殊な水槽の中に入れて生かし続けるのだとする。さらに、心理的な活動は大腦の物理的な機能に**随伴する**(*supervene*)、すなわち大腦の物理的機能に違いがなければ心理的活動にも違いがありえないと考えられるため、物理的機能に差し障りなく取り出された大腦は、手術前のトランプとそっくりの心理的な諸特徴を問題なく持ち続けるのだとする。このとき、水槽内で生かされ続ける存在者は、有機的な身体こそ持たないものの、かつてのトランプと心理的に継続するような人である——と同時に、その存在者は哲学でお馴染みの**水槽の中の脳**(*brain in a vat*)である——ように思われる。便宜的にこの存在者を「残存する人」と呼ぶことにすると、残存する人の取り扱いにおいて動物説は困難を抱える。第 3.1 節で見たように、動物説によると残存する人はトランプ自身ではない。大腦は動物ではないからである(その代わりに動物説論者は、大腦を取り出され、おそらく植物状態にあるヒトこそトランプであると主張するのだった)。では、残存する人はどうやって誕生したのだろうか。手術の前からすでに残存する人が存在していたと考えると、トランプの占める位置にはあらかじめ二人の人(残存する人とヒト)がいたことになる。これはあまりに奇妙な帰結であると同時に、上記の思考する脳問題を引き起こしてしまう。しかし、手術後に残存する人が誕生すると考えても奇妙である。ただヒトの組織を切り取るだけで人が新たに誕生することになってしまうからである。心理的な活動に重大な影響がもたらされる場合を除き、手足や指、胴体などのヒトの組織が切り取られた(または破壊された)ぐらいでは、人を因果的に新しく創造することはできない。よって、動物説は「残存する人がどこからやってきたのかについて優れた説明を与えることができない」(Johnston 2010, p. 302)。これは、**残存する人の問題**(*remnant person problem*)と呼ばれ、思考する脳問題と並んで動物説の抱える重大問題の一つである。

こうした二つの問題に対し、動物説はどのように応答できるだろうか。思考する脳の問題から見ていくことにすると、オルソン(および異なる文脈と動機ではあるがヴァンインワーゲンやメリックス)は、**生物を例外とする最小主義**(*biological minimalism*)を採用することで思考する脳問題の解決を図ろうとする(van Inwagen 1990, pp. 81–2; Olson 1995; Merricks 2001, pp. 47–53; Olson 2008)。彼ら応答者の支持するまばらな存在論(*sparse ontology*)においては、素粒子などの単純物(真部分を持たないもの)を除けば生物の諸部分や非生物は一切存在しない一方で、動物などの生物は存在論的に見て特別な地位に立つ。なぜならば、それは複数の単純物によって組成されて初めて存在するようになる存在者だからである。単純物による**組成**(*composition*)は次のように説明される。すなわち、複数の単純物の活動が生物学的な生命を形成するときかつそのときのみ、複数の単純物は生物を新たな存在者として組成する(Olson 2007, p. 226)^{*35}。他方で、脳などの非生物はいかなる単純物によっても組成されることはない。その代わりに、普段私たちが脳だと思って接する対象は実のところ、複数の単純物が脳状に配置された(*arranged brain-wise*)だけにすぎない(van Inwagen 1990, pp. 172–3; Olson 2007, p. 218)。言い換えれば、生物を

^{*35} これは、van Inwagen 1990, p. 31 が論じている通り、「諸事物はいつ他の何かを組成するのか」という**特殊な組成問題**(*special composition question*)に対する答えとなる。ただし、Merricks 2001, ch. 4 は、心理的性質の因果性に着目することで、ヒトやイヌの組成は認めるものの、意識を持たない生物の組成には疑問を呈している。

例外とする最小主義に立つ動物説論者は、「生物と単純物以外に物質的な対象はまったく存在しない」(van Inwagen 1990, p. 111)がゆえに、「物質の塊(hunk of matter)や心理的な持続条件をもった存在者、そして(中略)頭部[または脳]は存在しない」(Olson 2008, p. 40)と主張することができる^{*36}。

したがって、思考する脳問題は、諸前提のうち(14)を拒否することで回避することができる。「脳」で指示されるものは、複数の単純物が特定の仕方では集まったものにすぎない。つまり、生物を例外とする最小主義から導出される**脳の消去主義(brain eliminativism)**に基づけば、現在トランプの立っている絨毯の上に動物 *T* が存在することを認めるとしても、そこに脳が存在することまで認める必要はない。ゆえに、問題の絨毯の上に *T* とトランプの脳という二つの思考者が存在することを受け入れずに済む——動物以外の独立した思考者など最初から存在しないからである。

もちろん、これはあまりにも反直観的な帰結をもたらす解決法である。単純物を例外とするあらゆる人の諸部分、たとえばトランプの手足や頭部、器官などが一様に存在しないことになるばかりか、椅子や彫像などのあらゆる人工物や、山や川などの非生物的な自然物もまた——椅子状または山状などの仕方に配置された単純物以上のものとしては——存在しないことになってしまう。しかし、オルソンは次のように述べる。すなわち、「動物説論者は、生物を例外とする最小主義を採用することで、動物説が抱えるあらゆる形而上学的な懸念を一挙に解消することができる。たしかにそれは高くつく代償であるように見えるが、しっかりと役割を果たしてくれる」(Olson 2007, p. 227)。たしかに生物を例外とする最小主義は十分に望ましいというわけではないが、「思考する脳問題を解決可能なその他の望ましい解決策もまた見当たらない」(Olson 2008, p. 40)がゆえに、ベターな解決法ではあると考えられる。

同様の解決法は、残存する人の問題にも適用可能であるのは明らかだろう。残存する人の問題が強力であったのは、その議論が第 3.1 節で見たような移植に関する「直観」によって確立されるのではなく、「因果性と随伴性について私たちが知っていることの帰結を抽象的に反省することによって確立される」(Johnston 2016, p. 112)からである。オルソンはこの問題の重大さを認めただけで、生物を例外とする最小主義の観点から最終的に次のように論じる。すなわち、非生物だと考えられる脳はそもそも存在せず、存在するのはただ「脳状に配置された複数の素粒子」(Olson 2016a, p. 157)だけである。水槽の中には、そうした素粒子以外の人または統一された思考者など存在せず、それゆえに「どこからやってきたのか」謎が残るとされた残存する人も最初から存在しない。つまり、思考する脳問題の場合と同様に、脳の消去主義こそが残存する人の問題のよりよい解決法なのである——ただしそれは、オルソン自身も「過激であるかもしれない」(ibid., p. 158)と譲歩する解決法である。

以上の通り、オルソンは、私たちの直観や常識と著しく衝突するように思われる生物を例外とする最小主義、とりわけ脳の消去主義に立つことで、思考する脳問題と残存する人の問題の両者を一挙に解決しようと試みる。この方策が成功するかどうかは、複数の単純物が脳などのほとんど多くの存在者を組成しない一方で、ヒトを含む生物のみを組成することの根拠を正しく示すことができるかどうかによって依拠することに

^{*36} ただし、ヴァンインワゲンとオルソンは次の点で異なる。van Inwagen 1990, p. 118 によると、思考という活動は思考の主体という統一した存在者を要求するのに対し、Olson 2007, pp. 186–93 によると、思考は単純物の協働の結果として生まれる創発物かもしれず、必ずしも統一した存在者を要求するわけではない。

なるだろう^{*37}。

3.3 死体問題

次の問題に移ろう。それは、**死体問題** (*corpse problem*) と呼ばれ、次のような疑念として提起される (Carter 1999; Shoemaker 1999; Baker 2000, pp. 207–8; Markosian 2008)。

- (18) 動物説によれば、トランプが(ほとんど損傷がないまま)生命を失い存在しなくなるとき、そこには死体が残される。しかし、この死体がトランプの死の前から存在していたとすると、トランプとは数的に異なる「思考する身体」が存在していたことになってしまう。

動物説によると、トランプの身体とトランプという動物は数的に異なる存在者である。身体は、私たち動物が生命を失い存在しなくなったとしても、死体または生命のない身体として存在し続けることができるからである。では、この死体はどこからやってくるのだろうか。トランプの死の瞬間にトランプと死体が入れ替わり、その死が物質的な存在者を新たに生むことは考えにくいのだとすると、この死体はトランプが死ぬ以前から存在していたと考えるべきである。他方で、トランプの身体は、トランプという動物と同様に思考することができるはずである。というのも、その身体は思考するために十分な物理的基盤として脳を備えているからである。つまり、トランプが死ぬ以前から存在していた当の身体は、トランプとは別の思考者である。すると、死体問題がどのような問題を引き起こすかは明らかであろう。動物説は、第2.4節で見た思考する動物論証と同じ混雑した事態——トランプとその身体が同じ場所に異なる思考者として存在する事態——に陥ってしまうのである^{*38}。

この問題に対する動物説の応答とはどのようなものだろうか^{*39}。オルソン(少なくとも一時期のオルソン)の解決は次のようなものである (Olson 2004)。第一に、トランプと数的に同一である動物 *T* と、*T* の死後に問題となる死体は同一ではない。なぜならば、動物の持続条件は、死体の持続条件とは似ても似つかないからである。動物 *T* は、その生命が持続する限りにおいて持続し、その生命が途絶えるときに消滅する。他方で死体は、物質上の内在的な恒常性を保つのであれば、生命とは無関係に持続することができる。ゆえに、トランプと死体を同一視することはできない。

第二に、オルソンは「動物が死によって存在しなくなると考えるいかなる理由も一様に、動物が死を迎え

^{*37} 生物を例外とする最小主義への批判については、Madden 2016; Watson 2016 を見よ。Snowdon 2014b, pp. 234–6; Toner 2014 は、ジョンストンやオルソンに反して、ヒトの組織を切り取る(または破壊する)ことによって人を因果的に新しく創造することは決して不可能ではないと主張している。思考する脳問題に対するその他の解決策については、Yang 2015; Blatti 2016b; Lim 2018 を見よ。

^{*38} 死体問題は、胎児問題と対称をなす問題である。胎児問題については、注 48 を見よ。

^{*39} 第2.5節で見た一部の非標準的な動物説は、死体問題を容易に解決することができる。というのも、私たちヒトの持続条件が生命に適切な構造をもって組織化された一定の諸部分の保持にあるのであれば、トランプは「死んだ動物」でもありうるがゆえに、問題なく当の死体がトランプの死の前から存在していたと言えるからである。

る際に動物の死体が新たに誕生すると考えるための理由となる」(Olson 2004, p. 272)と主張する。動物 *T* が死を迎えるまで *T* と死体が同じ場所で異なる存在者(または思考者)として存在し続ける、と考えるべき理由はどこにもない。その代わりに死体は、生命を持っていた動物 *T* と入れ替わるようにして、トランプの死の瞬間に新たに存在するようになるようなものである。つまり、トランプの死とは、*T* すなわちトランプを消滅させ、さらに死体という新たな存在者を生み出す「非常に劇的な」(Olson 1997b, p. 152)変化である。この帰結が一見すると受け入れがたく見えるのは、トランプと当の死体が時空的に連続しているからにすぎない。しかし、時空的な連続性は当の死体がトランプの死の以前から存在していたことを示すのに十分ではない(*ibid.*, pp. 151–3)。たとえば、デカルトの悪魔があなたを形作る複数の単純物(たとえば素粒子)の配置を入れ替えて、ある豚を創造したとしよう。この豚はたしかにあなたと時空的に連続している。しかし、この抜本的な変化を経ても同一であるような存在者など、複数の単純物以外に存在しそうにない。この豚は以前から存在していたのではなく、デカルトの悪魔の悪戯の時点で新しく誕生したのである。トランプと死体の関係もこれと類比的だと考えられる。トランプの死は、彼を消滅させると同時に、それと同一ではないが時空的に連続する存在者として、新たに死体を生み出すような出来事なのである^{*40}。

とはいえ、私たちという実体を消滅させ、さらに死体という実体を誕生させるという意味で、死という出来事をいわば**実体変化**(*substantial change*)とみなすことには、少なくない疑義が呈されるかもしれない。そうすると、死の瞬間に動物の存在と入れ替わる仕方で死体が(どこからともなく)存在し始めるということに拒否感を覚える動物説論者は、どのように考えればよいのだろうか。一つの方法は、思考する脳問題の一つの解決策であった生物を例外とする最小主義を死体問題に応用することである。オルソンはこれを**死体の消去主義**(*corpse eliminativism*)と名付け、次のような主張として導入する(Olson 2013)。すなわち、私たちの死後には、死体状に配置された(*arranged corporeal-wise*)複数の単純物が存在するのみであり、死体という存在者はどこにも存在しない。死体についての言明は便利な虚構にすぎず、死体の持続条件がどのようなものであるかも同じく虚構にすぎない。思考する脳問題へのよりよい対処が脳の存在の消去であったように、死体問題もまた、死体の存在を消去することで容易に解決可能なのである。

かつてオルソンは、死体の消去主義を「過激な方策」(Olson 2004, p. 268)と捉え、死を実体変化とみなす解決策を好んで採用していた。しかし、近年になってオルソンは、死体の消去主義が「おそらくあまり安心できるものではないが、少なくとも理論的にはエレガントであるだろう」(Olson 2013, p. 94)と認めるようになった。これが「転向」であるかは議論の余地がありうるが、より重要なのは、死体問題を解決するにあたり、標準的な動物説がこれまで提示してきた選択肢はそれほど多くないということである。どれがよりよい選択肢であるかは、私たち動物にとって死体や死とはどのようなものであるかを明らかにする議論(たとえば死の形而上学)の進展も加味して考えねばならないだろう。

3.4 総括

我々はここまで、一方で動物説の内実・論証・多様性を、他方で動物説の問題とその応答を見てきた。

^{*40} その他の類似した応答は、DeGrazia 2005, pp. 54–6; Hershenov 2005; Toner 2011 を見よ。

そこから明らかにすることができるのは次の二つのことである。第一に、「私たちは動物(特にヒト)である」という見解は、直観的に正しいのみならず、思考する動物論証をはじめとする議論によっても支持される強力なものである一方で、「動物とは何か」が明らかでない以上、それはさらなるコミットメントを要求する見解でもある。第2.3節で与えられたオルソンによる生命維持に基づく説明は、動物説にとっておそらく標準的なものであるとはいえ、第2.5節で我々が確認したのは、その他のオプションも(ミニマルな)動物説と組み合わせることができるということである。とりわけ、ある動物(ヒト)がどのような持続条件を持つかを解明することは、動物説を十全な理論とするためには必須である——だがいずれにしても、人の存在論に「動物」という新たな観点を導入することで、動物説が第1節で見た従来の身体的基準を重視する陣営から大幅に発展した見解だという点は疑いえない。

第二に、第3節で見た一連の問題に対する標準的な動物説論者の応答は、動物説に認められる直観適合性とは対照的に、しばしば受け入れがたい帰結を招くものである。オルソンは、私たちが動物であると認める代わりに、脳移植に関する私たちの直観を(少なくともそのままの形では)棄却し、脳や死体などの非生物の存在を否定する。それでもオルソンは、動物説の拒否に比べればこれら帰結は受け入れるに足る代償であると主張するだろう。これらが本当に「代償」であるか、そしてその他の応答は可能であるかどうかに関する検討をはじめとして、動物説がなすべき仕事は依然として山積している^{*41}。

以上で、オルソンの見解を中心とした動物説のサーヴェイを締めくくりにしたい。

4 構成主義の主張

4.1 構成主義の背景

本節からは、動物説への有力な対抗理論とされる構成主義を見ていくことにしよう。構成主義の主な支持者には、ベイカーを筆頭に、シドニー・シュューメイカー、マーク・ジョンストン、フレデリック・ドイプキがいる(e.g. Baker 2000; Shoemaker 1984; Johnston 1987; Doepke 1996)^{*42}。彼らによると、私たち人は、先の動

^{*41} その他にも、動物説に対しては結合双生児の問題(*conjoined twins problem*)が提起される(McMahan 2002, p. 35; Campbell and McMahan 2010)。これによると、二つの頭部には何ら問題がないが主に首から下の身体が結合した双生児のケースは、一つの動物において異なる心的体系を持った二人の人物が存在することになるために動物説への反例となる。この問題に対しオルソンは、「二つの心的体系が存在するならば、二人の人物が存在する」という原理を拒否することで解決を図る(Olson 2014)。その結果、動物説にとって結合双生児のケースとは、ちょうど宵の明星と明けの明星が一つの天体であるのと同様に、二つの頭部および二つの心的体系を持つような一つの動物の事例であることとなる(これと類似した解決策はLuper 2014にも見られる)。ただし、Liao 2006; Snowdon 2014b, pp. 184–7が示唆するように、受精卵が(不完全とはいえ)分裂していることに着目すると、結合双生児は二つの動物とみなすことができるかもしれない。その他の解決策については、Blatti 2007を見よ。

^{*42} その他の構成主義者としては、Sosa 1987, Corcoran 1999; Wilson 2007; Pollock 2008 を挙げることができる。なお、構成主義で問題となる「構成」と生物を例外とする最小主義で問題となった「組成」は、通常次のように区別される。すなわち、前者は(大理石の塊とダビデ像のような)単一の事物 x と y の間で成立する関係であるのに対し、後者は(諸原子と特定の分子のような)複数の事物 xx と単一の事物 y の間に成立するメレオリジカルな関係である。本稿で用いる「構成」という訳語は、倉田 2017 に従うが、これとは逆に、“composition”を「構成」、「constitution」を「組成」と訳する場合

物説とは対照的に、動物(または身体)と数的に同一ではない。その代わりに、私たち人は動物(または身体)から構成される存在者である。たとえば、ドナルド・トランプは、彼の身体または動物 *T* から数的に区別されるが、それから構成されるような人だと考えられる。

しかし当然のことながら、構成主義には次の二つの疑念が呈されるだろう。第一に、なぜある人は彼女の身体と同一ではないのか。第二に、ある人が彼女の身体から構成されるとはいったいどのような事態として説明されるのか。第一の疑念は人と身体 of 非同一性に関係し、第二の疑念は人と身体 of 構成に関係する。以下では、これら疑念に対してどのような応答が与えられるのかを検討するため、構成主義を代表する支持者として知られるベイカーの主張を中心に見ていくことにしよう。

ただし、具体的な議論に入る前に、二つだけ注意点を確認しておきたい。一つの注意点は、用語上の規約に関わる。以下の論述では、簡便のために「身体」と「動物」を基本的に交換可能な語とみなすことにしたい。もちろんこれはいくぶん問題含みな規約ではあるだろう。というのも、「身体」が何を指すかはあまりはっきりとしない(身体と動物の関係性に対する動物説の説明(第 2.2 節)を参照せよ)、構成主義者の間でも、「身体」と「動物」がどのような関係にあるかについては意見の相違があるからである。たとえば、シューメイカーによると、「動物」という語には、生物学的な持続条件を持つ存在者という意味と、生物学的な動物から構成される心理的な持続条件を持つ存在者という意味の二つが存在する(Shoemaker 2009; Shoemaker 2011)。また、ジョンストンは、「身体または有機体(organism)」と「動物」を周到に区別したうえで自身の構成主義を擁護している(Johnston 2007)。しかしながら、議論が過度に複雑になるのを避けるため、本稿では特に断りがない限り、ベイカーにならって「動物」と「身体」という語の間には重要な違いはないと規約する。つまり、人を構成する身体とは、「ヒトという動物に属するような生物」(Baker 2000, p. 4)のことだと想定する。この規約のもとでは、トランプを構成する身体は、ヒトに特有の生物学的な情報を持ち、呼吸し代謝を行うような動物 *T* に他ならない。

もう一つの注意点は、多くの構成主義者が共通して受け入れる戦略に関する。その戦略とは次のものである。すなわち、あらゆる身近な対象に当てはまるよう構成関係一般の特徴や定義を示し、それに基づいて人と身体 of 構成への適用を試みるというものである。ほとんどの構成主義者にとって、構成関係の成立は人と身体だけに特有のアドホックな事態ではなく、この世界にありふれたごく日常的な事態である。たとえば、特定の彫像はある大理石の塊から構成される。また、特定の川はある水分子の集まりから構成され、特定の結婚届はある紙から構成される。よって、彫像と大理石の塊などのケースと人と身体 of ケースの間に一定のアナロジーが存在すると示ささえすれば、人が身体から構成されるという事態は比較的容易に説明することができる。この点において、構成主義は先の動物説とは異なる方法論に依拠した理論だと言える。それは一般に、「構成の形而上学」を確固たる基盤としたうえで人と身体へと応用する、比較的大がかりな形而上学的理論である^{*43}。

合もある。

^{*43} このことは、構成関係一般の形而上学を展開する論者がみな、人と身体 of 構成関係に応用しているということを含意しない。実際に、彫像と大理石の塊などのケースについてはいわゆる構成主義に立つ一方で、人については構成主義に立たない論者も少なくない。Thomson 1997; Wiggins 1980; Lowe 2009 がその代表的論者である(彼らは順に身

4.2 なぜ私たちは動物ではないのか：非同一性論証

いま構成主義が直面している上記の第一の疑念に対し、ベイカーはどのように応答するのだろうか。彼女によれば、人と身体の非同一性の説明にとって本質的な役割を担うのは、いわゆる**実体種性質** (*substance sortal property*)——彼女自身が好む術語では**第一種性質** (*primary kind property*)——である (Baker 1997; Baker 2000, ch. 2; Baker 2007, ch. 2)。実体種性質 F とは、それに属する任意の個体 x が F に属さなくなると、 x が存在しなくなるような性質を指す。これをベイカーは「 x が本質的に属する性質」と言い換えたうえで、 x が本質的に F であるのは、「 x が存在するあらゆる世界と時点において、 x は F に属するときかつそのときに限る」(Baker 2000, p. 36)と説明する。たとえば、彫像は実体種性質の一つである。なぜならば、ダビデ像は彫像という性質を例化することなくして存在することはできず、彫像ではないようなダビデ像など、(それが存在する)どの世界や時点にも存在しないからである。他方で、大理石の塊もまた実体種性質だと考えられる。ダビデ像の素材となる特定の大理石の塊——以下ではこれを M する——が存在するどの世界や時点においても M は例外なく大理石の塊に属するからである。この意味で、 M は本質的に大理石の塊に属する。したがって、 M は大理石の塊という実体種性質に属する個体である。

それでは、本質的に大理石の塊である M は、本質的に彫像でもあるのだろうか。ダビデ像が本質的に大理石であるかどうかについてはたしかに議論の余地があるにせよ、 M の場合、それが本質的に彫像に属するわけではないことは明らかだと思われる。なぜならば、もし芸術という文化領域(アートワールド)が一切存在しなかったとすれば、彫像という美術品であるダビデ像は決して存在しえない一方で、 M は芸術とまったく関係しなくとも単なる大理石の塊として存在し続けることができるからである。こうした点を一般化すると、実体種性質における違いは、ベイカーの言葉を借りれば「本質的な性質における違い」(Baker 2000, p. 196)にあるとすることができる。いまの例では、ダビデ像が属する彫像と M が属する大理石の塊の違いは、芸術という文化領域と密接に関係する性質をダビデ像と M が本質的に持つかどうかによって依拠する。そして、 M は本質的には芸術という文化領域と関係するわけではないのだ。ゆえに、 M は本質的に大理石の塊に属するとしても、本質的には彫像に属さない—— M はこの世界で偶然に彫像の素材に選ばれただけである。

私たち人と身体または動物の関係性は、こうした彫像と大理石の塊の関係性と類比的である。ベイカーによれば、「人は本質的に心理的・道徳的な存在者である一方で、人体は本質的に生物的な存在者」(Baker 2000, p. 105)である(cf. Baker 2007, p. 70)。というも、人は心理的・道徳的性質なくしてはもはや存在しえないが、人体すなわち動物の場合は「DNA によって本質的に統制される」(Baker 2000, p. 116)がゆえにその限りではなく、心理的・道徳的性質と一切関係しないような人体も存在してよいからである。実際、脳機能が不可逆的に破壊され、心理的な機能を担う器官や道具がその他に内在しないような個体は、生命活動を継続する限りにおいて人体(動物)ではあるものの、人とは言いがたいように思われる。よって、たとえば人であるトランプは本質的に心理的・道徳的な存在者である一方で、本質的に生物的で

ある彼の身体 T は、本質的に心理的・道徳的な存在者というわけではない。先述したように、実体種性質の違いは「本質的な性質における違い」にあるのだった。このため、トランプと身体 T は、人という実体種性質に属するかどうかにおいて明確に異なる。

上記の実体種性質に関する説明により、先の第一の疑念へ応答する準備は整った。人と身体 of 非同一性は、次のような論証によって示すことができる。

- (19) トランプは、実体種性質として人という性質を持つ(または、トランプは人と関連する特定の心理的な性質を本質的に持つ)。
- (20) トランプの身体 T は、実体種性質として人という性質を持つわけではない(または、 T は人と関連する特定の心理的な性質を本質的に持つというわけではない)。
- (21) ゆえに、トランプと T は——仮に空間的に一致しているとしても——同一ではない。

(19)と(20)から結論である(21)が正しく導出されることは、ライブニッツの原理または同一者不可識別の原理(の対偶)により明らかである。この原理によれば、任意の個体 x と y が何らかの性質において異なるとき、 x と y は同一ではない。前段落で見たように、トランプは実体種性質として人に属する一方で、身体 T は必ずしも人に属するというわけではない。このため、(19)と(20)が成立し、ライブニッツの原理により(21)が成立する。その結果、トランプと彼の身体 T は、人に属するかどうか、または人と関連する心理的・道徳的な性質を本質的に持つかどうかにおいて異なるがゆえに——空間的な位置を共有しているのだとしても——同一ではない。このことはあらゆる人と身体に適用可能である。以下では、人と身体 of 非同一性を示すこの論証を便宜的に**非同一性論証**(*non-identity argument*)と名付けよう。

以上から、構成主義に対する第一の疑念を解消することができた。ベイカーによると、ある人が彼女の身体と同一でないと主張できるのは、非同一性論証のおかげである。後の第 4.5 節で簡潔に触れるように、ベイカーの他にも少なくない構成主義者が、人と身体(動物)の非同一性について論じる際に、人の心理的特徴に着目して両者の間の種性質や本質的な性質に相当する性質の違いを重要視するのは決して偶然ではない(Johnston 1987; Sosa 1987; Doepke 1996, ch. 6; Corcoran 1999; Shoemaker 1999; Wilson 2007)。構成主義にとって非同一性論証は、私たち人と動物を存在論的に区別することを動機づけ、動物説を退けるための最も強力で影響力のある基盤である(人と動物という性質に対する動物説の説明(第 2.3 節)と比較せよ)。

4.3 人と一人称観点

しかし、人と身体が同一ではないのだとすると、それらはいったいどのような関係にあるのだろうか。当然のことながら、構成主義はこの問いに対し「構成関係にある」と答える。だがそうした場合でも次の第二の疑念は残されたままである。すなわち、ある人が彼女の身体から構成されるとはいったいどのような事態として説明されるのか。構成主義者はこれに答えねばならない。

構成関係の成立を詳しく論じているのは、またもベイカーである (Baker 1999a; Baker 2000, ch. 2; Baker 2007, ch. 2)。彼女の主張を大幅に簡略化して述べれば、ある時点における構成関係の成立は、実体種性質と空間的一致、状況によって説明可能である^{*44}。この三者が身体による人の構成をどのように特徴づけるのかを順に見ていこう。

まず実体種性質については、先の非同一性論証で見た通りであるため詳しい説明は不要だろう。トランプは人という実体種性質に属し、その身体である T は (ヒトの有機的な) 身体という実体種性質に属する。ベイカー自身が「 x が y を構成するならば、 x と y は異なる種に属し、異なる種類の変化を生き抜くことができる」(Baker 2000, p. 29) と述べる通り、トランプと T が構成関係にあるために第一に必要なのは、それらが異なる実体種性質に属し、それゆえに同一ではないということである。

続く特徴づけは、空間的一致の必要性を述べるものである。身体 T がトランプを構成する際、トランプと T は空間的位置を完全に共有するという意味で完全に一致する。ベイカーによれば、空間的に一致していない個体どうしの構成関係は一般にありえない (それは「構成」の名に値しない)。このため、バラク・オバマの身体とトランプは、たしかにそれぞれ身体と人に属する個体ではあるものの、空間的に一致しない限り構成関係にあることはない。構成関係は、「空間的に一致するような基本的に異なる種に属する事物」(Baker 2007, p. 32) の間に成立する一般的な関係なのである。

最後の「状況」に移ろう。これは、構成関係の成立にとって極めて重要な役割を果たす特徴づけである。 x が偶然的に置かれる状況 D とは、 x による y の構成関係が成立するための条件であり、 y が実体種性質に属するようになるための条件だとされる。ベイカーによれば、 x が y を構成する場合、 x の偶然置かれる状況がどのようなものであるかは、新たな存在者として構成される y の属する実体種性質に応じて多様である。つまり、「数多くの様々な種類の第一種性質[すなわち実体種性質]が存在し、それに応じてその各々の例化物に親和的な様々な種類の状況が存在する」(Baker 2007, p. 160)。たとえば、ダビデ像が大理石の塊 M によって構成される場合、 M は「彫像に親和的な状況」に置かれねばならない。彫像に親和的な状況とは、たとえば制作者の意図的行為によって制作され、芸術という文化領域で三次元の姿を持つ鑑賞物として展示されるというものだろう。こうした特定の状況に M が置かれることで、ダビデ像は彫像に属することが可能となり、また M はダビデ像を構成することが可能となる。他にも、特定の紙がある結婚届を構成するには、その紙切れが「特定の法の適用範囲内にある」などの状況に置かれる必要がある。これを一般化すれば、次のように述べることができる。すなわち、「ある種類の事物が特定の状況に置かれると、それとは異なる種類の存在者が新しく誕生する」(Baker 2018, p. 343)。

問題は、人の構成において身体が置かれる必要のある「人に親和的な状況」とはいかなる事態であるかである。ベイカー独自の考えによると、人が構成されるための状況、またはある人が人に属するようになるための状況は、**一人称観点** (*first-person perspective*) の獲得と同定される (Baker 2000, ch. 3; Baker 2007, ch. 4; Baker 2013b, ch. 7)。言い換えれば、人が特定の身体または動物によって構成されるのは、その身体または動物が問題の人と空間的に一致しながら、その人に特有の一人称観点を持つようになる

^{*44} 正確に述べれば、ベイカー自身は必然性と可能性を用いた様相に関する特徴づけなども与えているが、本稿では紙幅の都合上省略する。

ときかつそのときのみである^{*45}。それゆえ、「ヒトが一人称観点を持つようになるほどに成長するとき、新たな存在者として人が誕生する」(Baker 1999b, p. 155)^{*46}。一人称観点は、他者への心的性質の帰属、合理的行為、道徳的責任を負うことなどの「人に特徴的な多くの活動に關与する」(Baker 2013b, p. 184)もので、いかなる人も「本質的に一人称観点を持つ」(Baker 2007, p. 69)とされる^{*47}。

ここで言われる一人称観点とは、一人称代名詞を用いることで自身のことを(他の事物から区別される)自身だと考え、自身を思考・行為の主体としてみなすことができる言語的・心理的な概念能力を指す(Baker 2013b, ch. 8)。ベイカーによれば、「感覚能力を持つあらゆる存在者は、経験の主体である(つまり意識を持つ)ものの、感覚能力を持つ存在者がすべて、自分の一人称的な概念を持つわけではない」(Baker 2000, p. 60)。たとえば、感覚能力を持つ存在者のうち、チンパンジーと乳幼児は次の点で共通している。すなわち、両者は「自身を取り囲む環境と意識的かつ志向的に影響し合うことのできる能力」(Baker 2013b, p. 173)を持つ一方で、「自身のことを自身として把握できる能力」(*ibid.*, p. 174)を必ずしも持つわけではない。この点で両者は、意識や志向性しか要請しないような**未発達**の(*rudimentary*)一人称観点しか持たず、自身を思考や行為の主体としてみなすことのできる概念能力という意味での**強固な**(*robust*)一人称観点を持っていない。

では、チンパンジーと乳幼児は人ではないのだろうか。ベイカーは上記の共通点にもかかわらず、乳幼児はチンパンジーなどの動物から存在論的に区別される人であると考え。なぜならば、乳幼児は、**強固な一人称観点を持つような傾向性を持つ**からである。つまり、乳幼児がチンパンジーから存在論的に区別されるのは、「人の乳幼児の持つ未発達の一一人称観点が強固な一人称観点を持つための発展途上にあり、チンパンジーの未発達の一一人称観点はいかなるものの発達途上にもない」(Baker 2007, p. 79)からである。言い換えれば、未発達の一一人称観点しか持たないような乳幼児が人であるのは、「強固な一人称観点を通常発達させる種にその者が属するときのみである」(*ibid.*)。よって、たとえばトランプが身体 *T* によって構成される場合の「人に親和的な状況」とは、次のような選言的な事態として説明することができる。すなわち、(主にトランプが成人している時点では)身体 *T* は強固な一人称観点を持っているか、または(主にトランプが乳幼児である時点では)身体 *T* は強固な一人称観点を持つための発展途上にある未発達の一一人称観点を持っている^{*48}。いずれにしても、乳幼児を含む私たち人を身体から区別し存在論的に

^{*45} 同時に、ベイカーによれば、「私たち人こそが道徳的な主体であり、計画する唯一の存在者」(Baker 2000, p. 17)であり、「一人称観点を持つことは道徳的な行為者であるための必要十分条件である」(*ibid.*, p. 156)。

^{*46} ただしベイカーは、一人称観点に基づく人の持続・同一性条件が循環したもので情報量を持たないという点を積極的に受け入れていることに注意せよ(Baker 2007, pp. 71–2; Baker 2012; Baker 2013b, pp. 149–50 を見よ)。彼女によれば、問題となるのがどの一人称観点であるかを決定するには人への言及が避けられず、人という性質の例化は創発的なものである。これは、人についての還元主義を拒否し、人の同一性が他のものに存することはないという意味で単純だとみなす見解、いわゆる**単純説**(*simple view*)の一種である。

^{*47} 人の構成において一人称観点を重視する構成主義は、Corcoran 2006, ch. 3 でも表明されている。また、これと類比的な構成主義は、Doepke 1996, ch. 9 でも提示されていると見ることができる。それによれば、私たち人が身体によって構成されるのは身体が理性の意識を可能にするときであり、自己への気付き(*self-awareness*)は私たちのあり方を説明する本質的性質だとされる。

^{*48} ベイカーによれば、妊娠初期の胎児は、乳幼児と違って人ではない(Baker 1999b; Baker 2000, pp. 204–8; Baker 2007, pp. 72–5)。このことから、ベイカーは「未発達の一一人称観点が発達する以前の妊娠中絶が殺人であると述べる

特別なものにするのは、一人称観点の獲得に関する言語的・心理的な環境である。そして、「あらゆる第一性質[実体種性質]は持続条件を決定する」(Baker 2007, p. 219)のために、ある身体または動物が存在し続けるかどうかは、「生物の機能が保持されるかどうかによる」一方で、ある人の存在や持続は「一人称的な観点を持つかどうかによる」(ibid., p. 68)のである。

先の第二の疑問とは次のようなものだった。すなわち、ある人が彼女の身体から構成されるとはいったいどのような事態として説明されるのか。上記の簡略化されたベイカーの説明に従えば、この疑問は次のような応答をなすことで解消することができるはずである。

任意の身体 x と人 y と時点 t について、 x が t において y を構成するということは次のように定義される。すなわち、

(22) x は実体種性質として身体という性質を持つ一方で、 y はそれとは異なる実体種性質として人という性質を持ち、かつ

(23) x と y は t において空間的に一致し、かつ

(24) x は t において次のような人に親和的な状況にある。すなわち、 x は強固な一人称観点を持つか、または x は強固な一人称観点を持つための発展途上にある未発達の一一人称観点を持つ。

したがって、先の非同一性論証も併せて考えると、人と身体 of 非同一性と構成関係は次のように説明可能である。すなわち、それらの非同一性は、人と身体という実体種性質または本質の違いに基づく一方で、それらの構成関係は、種性質にくわえて、空間的一致と一人称観点の獲得に関係する状況によって解明される、と。以上から、構成主義の「人は身体と同一ではないが、身体から構成される」という基本的なテーゼ、特にベイカー的な構成主義によるテーゼの敷衍は、(大幅に簡略化された形ではあるが)明らかにすることができたように思われる。

4.4 統一性による性質の借り合い

だが、より素朴な疑問は依然として残る。結局のところ、ベイカーが想定する「構成関係」とは、それが同一性から明確に区別されるのだとしても、どのような関係なのだろうか。この点について、ベイカーは上記の説明にくわえて、次のような説明を与えている(Baker 1999a; Baker 2000, ch. 2; Baker 2007, ch. 8)。すなわち、構成関係は、同一性と別個性(separateness)の中間に位置する第三のカテゴリーに属する(非

いかなる前提も誤りである」(Baker 2005, p. 44)という道徳的な含意を引き出す(なお、DeGrazia 2005, ch. 7 で論じられている通り、動物説論者でも初期人工妊娠中絶が道徳的に許容されると主張可能である)。しかし、Olson 1997a, p. 74 が指摘するように、胎児と乳幼児の存在論的区別は、奇妙にも「私たちはみな胎児だった」ということを否定しまい、そして乳幼児がある時点で突然(胎児とは数的に異なる存在者として)存在し始めるということを意味してしまう。これは胎児問題(fetus problem)と呼ばれ、構成主義が抱える問題の一つである。ベイカーによる胎児の問題への解決策については、注 54 を見よ。ただし、注 18 で簡潔に見たように、胎児を脳幹などをまだ持たない胎芽(ヒト胚)に置き換えると、ヒトの同一性が脳幹の存在にあると考える動物説にとっては胎芽問題(embryo problem)が新たに生じうる。

対称的で推移的な)関係である。たとえば、トランプと身体 *T* の構成関係は非同一性論証で見たように同一性関係ではない一方で、それらは互いから完全に独立に存在しているわけでもない。つまり、構成関係は、たとえばトランプと富士山または身体 *T* と目黒川の間に成立するような別個性から明確に区別される関係である。実際、存在論的に完全に別個のものと考えするには、トランプと身体 *T* があまりに多くの共通点を持っていることは明らかである。それらは時空的に一致し物質的諸部分を共有しているのにくわえて、それらは基本的性質もまた数多く共有している。たとえば、トランプと身体 *T* は、身長や体重に関する性質を共有するはずである。また、トランプがある書面にサインするときには身体 *T* もまたその書面にサインしている一方で、身体 *T* が外傷を負っているときにはトランプも外傷を負っているはずである。この意味で、両者は同一ではないにもかかわらず瓜二つである。この奇妙な事態はいかにして説明されるのだろうか。

構成関係の特殊性を詳述する際にベイカーが頼るのは、次の事態の成立を許すような**統一性**(unity)である。すなわち、構成関係にある特定のひとその身体は、その統一性のゆえに「性質の双方向的な派生」(Baker 2000, p. 48)の関係、すなわち「お互いに性質を借り合う(two-way borrowing)」(Baker 2007, p. 39)という関係にある。ベイカーによれば、ある性質の持ち方は、次の二つに区別される。一方は派生的に(derivatively)その性質を持つことであり、もう一方は非派生的に(nonderivatively)その性質を持つことである。ある個体 *x* が派生的に性質 *P* を持つとは、非派生的に(つまり *x* との構成関係とは独立に) *P* を持つような *y* が *x* と構成関係にあるおかげで *x* が *P* を持つということである。また、ある個体が特定の性質 *P* を非派生的に持ち、かつそれと構成関係にある個体が *P* を派生的に持つとき、そのことは *P* に関して二つの独立した例化があるということを意味しない。というのも、後者による *P* の例化は前者による *P* の例化に根拠づけられているからである。こうした性質の持ち方の区別をベイカーは、**要となる区別**(Key Distinction)と呼ぶ。

たとえば、トランプの身体 *T* が足を骨折するとき、トランプもまた足を骨折し、彼は正しく「私は足を骨折している」と述べることができるはずである。しかし、一方で *T* はトランプとの構成関係とは独立に足を骨折するがゆえに足の骨折に関する性質を非派生的に持つと言えるが、トランプはこの性質を派生的に持つ。換言すれば、トランプは足の骨折に関する性質を *T* との構成関係にあるおかげで持つ。対照的に、トランプが特定の意図をもって何らかの書面にサインするとき、彼は書面のサインに関する性質を非派生的に持つが、身体 *T* はその性質を *T* とトランプとの間に構成関係が成立するおかげで持つことができる。

このように、構成関係にある個体どうしは、同一性関係にないとしても数多くの性質を——特筆すべき例外を除いて^{*49}——借り合うような統一性の関係にある。つまり、「構成する側の個体と構成される側の個体によって多くの性質が共有されるのは、構成関係が(同一性ではないとしても)統一性であるおかげ」(Baker 2007, p. 39)である。言い換えれば、構成関係は、「単なる空間的一致ではなく」(Baker 2000, p. 46)、「多くの点で同一性と類似した関係ではあるものの、それは厳密またはライブニッツ的な意味で理解可能な[すなわちライブニッツの原理を満たすような同値関係としての]同一性と同じ関係ではない」(ibid.,

^{*49} 借り合うことのできない性質については、Baker 2000, pp. 48–9; Baker 2007, p. 167 を見よ。そのうちに、「実体種性質として人に属する」や「本質的に心理的である」などの一部の様相的な性質が含まれていることは注目に値する。この点については注 51 も見よ。

p. 29)。ベーカーが好んで用いる言い回しを用いると、構成関係とは**同一性なき統一性** (*unity without identity*) である。したがって、本節の冒頭で提起した疑問に対するベーカーの応答は次のようになる。すなわち、構成関係は、同一性のみならず別個性からも区別され、さらに性質の借り合いを可能にするような統一性の関係に他ならない。

4.5 構成主義の多様性

ここまで我々は主としてベーカーによる構成主義を見てきた。しかし、第 2.5 節で見た動物説の多様性と同様に、実のところ構成主義内部においても多様性が存在する。本節では、構成主義者と目される主要な論者がどのような主張を行い、それがベーカーのものといかなる点で異なる(または近い)のかを見ていくことにしよう。

主要な構成主義者の一人であるシューメイカーは、人の同一性の議論において古くから心理的継続性を重視してきた論者としてもよく知られる。彼は、人の同一性の議論において新ロック主義に立ち、「新ロック主義は[空間的に]一致する諸対象をまさしく必要とする」と考える。なぜならば、「人と彼または彼女の身体は、異なる持続条件を持つがゆえに同一ではない」(Shoemaker 2008, p. 314)からである。身体は生物的な持続条件を持つのにに対し、人は心理的な持続条件を持つ。それゆえ、シューメイカーは、ベーカーと同様に「身体または生物学的な動物が人を構成する(中略)と述べるのは自然である」(Shoemaker 2012, p. 243)と述べ、構成主義の基本的なテーゼを支持する(cf. Shoemaker 1984)。

他方で、「性質の借り合い」については、シューメイカーはベーカーと部分的に衝突するような見解に立つ。彼は、性質一般を**薄い** (*thin*) 性質と**分厚い** (*thick*) 性質に区別し、それぞれ次のように特徴づける(Shoemaker 2011; Shoemaker 2012)。薄い性質は、異なる持続条件を持つ複数の個体によって共有可能な性質であるのに対し、分厚い性質はそれを例化する事物の特定の種——特に、関連する特定の持続条件によって同定されるような特定の種性質——と強く結び付き、それ以外の種に属する個体によっては例化されえないような性質である。薄い性質の代表例は大きさや重さに関する性質であり、分厚い性質の代表例は種性質である。

そのうえで、彼は次のように述べる。すなわち、「私の生物学的な動物が実際に持つ薄い物理的性質を持っていることは、たしかに私が実際に持つ心理的な性質を持つものが存在することを決定する。しかし、その心理的性質を持つものとは、生物学的な動物ではなく、むしろそれが構成するような人である」(Shoemaker 2008, pp. 319–20)。シューメイカーによると、心理的性質の例化を通時的に統一するよう因果的に働きかけるものは心理的な継続性である。たとえば、人が現在どのような信念や欲求を持つかは、過去の時点においてその人が持っていた信念や欲求によって大部分が決定される。このため、思考や信念、欲求などの心理的性質の例化や保持は、心理的な継続性によってその持続条件が同定される性質、すなわち「人」という種性質と強く結び付くことになる(Shoemaker 2012)。これは、心理的性質が分厚い性質であるということを意味すると同時に、生物的な持続条件によって同定されるような種性質である動物や身体に属する個体は心理的な性質を人と共有できないということを意味する。つまり、心理的性質は「心

理的な持続条件を持つ事物にしか属しえない」(Shoemaker 2004, p. 528)のである。したがって、シューメイカーに従うと、ベイカーの「性質の借り合い」というアイディアは部分的な修正を迫られる。これによれば、人はたしかに心理的な観点から理解できる性質を非派生的に持つと言ってよいが、動物または身体はこうした分厚い性質を——派生的かどうかに関係なく——持つわけではない。その結果、ベイカーとシューメイカーはともに構成主義に立つものの、心理的性質を持ちうる個体が人に制限されるかどうかにおいては衝突すると言えよう。

また、ジョンストンもベイカーやシューメイカーと同じように、人は——「人」の代わりにジョンストンは「人間 (human being)」という語を好むが——生物としての身体から数的に区別される一方で、それから構成されると考える。彼の言葉で述べれば、「私は人間であり、人間は人体から構成される」(Johnston 1987, p. 63, fn. 7)。ジョンストンが構成主義に立つ主要な理由は、人または人間という種と、ヒトまたは生物という種が明確に異なり、それゆえに人とヒトの間で通時的に持続する条件が異なるためである。一方でヒトは、その通時的な持続に際して心理的な機能に特権的な地位が与えられないような「完全に生物学的な種」であるが、他方で人は「部分的には心理学的な種」(ibid., p. 79)である。なぜならば人は、心理的な特徴を保持し続けるのであれば、水槽の中の脳——第3.2節で見たようにそれはもはや動物ではないような残存する人である——としても存在し続けることができるからである(Johnston 2007; Johnston 2016)。このために、たとえばトランプが通時的に同一であり続けるのは、その心理的な機能が継続するときである。ジョンストンによれば、こうした心理的な機能は脳の機能に基づく。よって、人または人間の持続条件は、生物とは異なり、「人間の精神的な活動を継続させる限りでのただの脳の条件へと還元される」(Johnston 1987, p. 64)。人であるトランプにとって本質的なのは、彼の脳による心理的機能の継続性である。人と動物を区別する際に種や心理的機能に頼るジョンストンの説明は、基本的にはベイカーの構成主義からそれほど遠からぬものであるように思われる。

ただし、ジョンストンは、構成関係一般の成立を特殊なメレオロジカルな関係で説明しようとする点においては、ベイカーとは明確に異なる(Johnston 2005; Johnston 2006; Johnston 2010, pp. 199–203)。ここで言われる「特殊なメレオロジカルな関係」とは、いわゆる古典外延メレオロジーで登場するような古典的な部分関係ではなく、ジョンストン独自の**質料形相論**で登場するような「正真正銘の部分 (genuine part)」の関係を指す。この考えを人と身体の関係に適用すると、人が存在することは次のように説明可能である。すなわち、頭部や胴体、四肢などの人の諸部分としての「質料」が、人という全体を生むために必要な性質・関係としての「形相」によって規定されるということである。たとえば、トランプが存在するのは、彼の頭部や胴体などの質料 m が人に特有の形相によって特徴づけられるおかげであり、このとき質料 m は、トランプの存在を促すがゆえにトランプの「正真正銘の部分」と呼ばれる。他方で、トランプの身体 T の正真正銘の部分は m ではなく特定の諸細胞だと考えられ、 T はそれら細胞が身体に特徴的な形相によって規定されることではじめて存在するようになる。このため、ジョンストンの考えでは、トランプと彼の身体 T はたしかに空間的に一致し最終的には同じ最下層の物質諸部分と関係するものの、それらは異なる正真正銘の部分から成る数的に区別される二つの個体である。たとえば、私たちがよく知る顔(頭部)はトランプの正真正銘の部分にこそなれ、身体 T の正真正銘の部分にはならない。したがって、人と身体の間的一般

的な構成関係は、諸部分としての質料とそれを規定する形相を用いて質料形相論的に解明することができる。これは、ベイカーが「諸部分の同一性は構成から導かれる結果であり、構成の条件というわけではない」(Baker 2007, p. 162)と述べたことと明確な対比をなすものである^{*50}。

以上の少なくとも二つの種類の構成主義から読み取ることができるのは次のことである。すなわち、「私たち人は身体と数的に異なるが、身体から構成される」という構成主義の核心的な主張は、「構成」をどのように理解するかに応じて、その他の様々な主張と組み合わせることができるということである。とりわけ、性質の借り合いの範囲から分厚い性質を除外するかどうか、構成関係をメレオロジカルな観点から理解するかどうかなどの問いは、構成主義の多様性とさらなる展開可能性を私たちに提示するだろう。

5 構成主義の問題と応答

それでは、動物説の場合と同様に、構成主義が抱える主な問題とその応答を簡潔に見ていくことにしよう。本節で取り上げるのは(少なくとも)三つの問題である。ただし、特に断りがなければ、以下では「構成主義」という語で主にベイカーによる構成主義を念頭に置くこととする。

5.1 「私たちは動物である」問題

まず、動物説の観点から構成主義へのありうる反論を考えよう。それは次のような問題である。

- (25) 構成主義によれば、私たち人は各々の動物(特に、ホモ・サピエンスに属する生物)から構成され、私たちは各々の動物と数的に同一ではない。しかし、これは、「私たちはホモ・サピエンスに属する動物である」という直観的に明らかに正しい言い回しと衝突してしまう。

ベイカーによれば、人は動物から数的に区別される一方で、「私たちは人である」(Baker 2000, p. 4)。これは、あらゆる構成主義者が受け入れる基本的な見解であるとともに、構成主義が動物説と対立するゆえんでもある。しかし、私たちが動物ではないという帰結はあまりに信じがたいように思われる。動物説が魅力ある見解であったのは、それが私たちの直観・常識に寄り添うように思われたからである。鏡に映った自分を見て、それがホモ・サピエンスに属する特定の動物であることを否定することなど誰ができるのだろうか。多くの人は自らを動物であると考え、「私たちはみな動物である」という文が真だと信じる。ところが、構成主義は驚くべきことに、この誰しもが認めうる常識を拒否せねばならないように見える。以下では、こうした困難を便宜的に「私たちは動物である」問題(‘we are animals’ problem)と名付けよう。

^{*50} また、Johnston 2010, ch. 4 は、私たち人の本性とは本質的に移ろいやすい(Protean)という主張を展開する点で、その他の構成主義者とは一線を画する。これによると、私たち人の同一性に関する事実は、私たちが私たち自身をどのようなものと同一視し判断する傾向性を持つかに依存して決定されるがゆえに反応依存的である(しかしながら、注 60 で説明されるベイカーの実践的実在論は実のところ、ジョンストンの見解からそれほど遠からぬものかもしれない)。

この問題に対する構成主義者の応答は、「私たちは動物である」に含まれる「動物」を特定の性質とみなすか個体とみなすかに応じて、少なくとも二種類存在する。第一の応答は「動物」を性質とみなしたうえで、ベイカーによる「性質の借り合い」を利用するものである(Baker 2000, pp. 197–204)。ベイカーによれば、人と身体の関係に基づく性質の借り合いは、書面へのサインや骨折などだけでなく、種性質などにも当てはまるとされる。たとえば、「あなたは非派生的に人であるが派生的にはヒトである一方で、あなたの身体は非派生的にヒトであるが派生的には人である」(Baker 2007, p. 38)。このとき、あなたは、あなたの身体(動物)と構成関係すなわち統一性のある関係にあるおかげで動物である。つまり、人である私たちは動物である——少なくとも派生的には動物である。したがって、構成関係にある対象の間の性質の借り合いが種性質にまで及ぶのであれば、ベイカーは「私たちは動物に属する」という否定しがたい直観を棄却せずに済む。

ここで注意すべきは、性質の借り合いが実体種性質、すなわち**本質的に**持たれる種性質にまでは及ばないということである(Baker 2007, p. 167)。言い換えれば、私たちは私たちの身体と構成関係に立つおかげで動物という種性質を借りることができるのだとしても、そのことは私たちが実体種性質としての動物という性質、すなわち**本質的に**動物であるという性質を借りることができることを意味してはならない——もしこれを意味するとしたら、第 4.2 節で見た非同一次性論証は途端に成立しなくなってしまうからである。つまり、私たちが各々の身体と数的に同一でないことが人と身体(動物)という実体種性質の違いに存する限りにおいて、私たちは本質的に生物学的な動物であることはありえず、さらに私たちを構成する各々の動物もまた本質的に心理的・道徳的な人であることはありえない。このことは、構成関係の成立が——構成する側の個体が「親和的な状況」に置かれることは偶然であるゆえに——常に偶然であること(*ibid.*, p. 164)、そして統一性としての構成関係のおかげで性質の借り合いが可能となることから自然に導かれる帰結でもある^{*51}。したがって、ベイカーの理論的枠組みのもとでは、私たち人は、派生的そして偶然に単なる種性質としての動物である一方で、派生的かどうかに関係なく実体種性質としての動物ではありえず、本質的には動物というわけではない^{*52}。

他方で、「私たちは動物である」と言い回しに含まれる「動物」が性質ではなく個体を指すのだとすると——第 2.2 節で見たように動物説が「動物」で意図していたのも個体である——構成主義はこれにどのよ

^{*51} Baker 2007, p. 38, fn. 32 によれば、ある性質の持ち方には、非派生的に持つことと派生的に持つことという「要となる区別」が存在していたのと同様に、種性質の持ち方にも本質的に持つことと偶然に持つことという区別が存在する。このとき、本質的に持たれる実体種性質は、偶然的に持たれる種性質から区別される性質というわけではなく、一つの性質が異なる様相のもとで例化されるにすぎないとされる。よって、種性質の借り合いにおいて問題となるのはその持ち方であり、人は派生的あるいは偶然的にしか動物という種性質を持ちえないということになる。

^{*52} それゆえ、Baker 2000, p. 116; Baker 2013a によれば、一人称視点の多重実現可能性が認められる限り、非生物学的で人工的な身体またはシリコンチップから私たち人が構成されることも可能である。これに対する動物説論者からの反論については、Snowdon 2014b, pp. 196–200 を見よ。また、Baker 2001; Baker 2012; Baker 2018 は、私たちは現に持っている特定の身体以外の身体から構成されることも可能だとして、**死後の生**(*life after death; afterlife*)やキリスト教上の**復活**(*Resurrection*)の可能性を積極的に認め、そのことを構成主義の大きな利点と考える(ただし、Corcoran 2006, ch. 5 が死後の生や復活のためには数的に同一の身体が必要であると主張していることからわかるように、構成主義者の間でも意見は必ずしも合致しない)。これに対する動物説論者の見解については、Snowdon 2014b, p. 250; Olson 2018a を見よ。

うに応答すべきだろうか。この問題に対する構成主義者のよく知られた応答は、「である」という繫辞の言語的多義性に着目するものである(Shoemaker 1984; Baker 1999a; Baker 1999b; Baker 2000, pp. 54, 112; Johnston 2007)^{*53}。これによると、「私たち」と「動物」を言語的に結び付ける「である」は、「キケロはタリーである」という言い回しに含まれる「である」と同義ではない。後者の「である(is)」は、数的同一性を表す「である(is identical to)」のに対し、前者の「である(is)」は、構成関係を表す「である(is constituted by)」と考えられるからである。したがって、私たちが各々の動物と数的に同一ではないとしても、「私たちは動物である」という言い回しの妥当性まで否定する必要はない。私たちが一人一人各々の動物から構成されさえすれば、その言い回しは、構成関係の「である」から成るがゆえに真となるからである^{*54}。

しかしながら、こうした第二の応答には——英語という特定の自然言語に特有の解決法ではないかという疑念がつきまとうのにくわえて——日常的な言語実践からかけ離れたラディカルな意味論を構築してしまうという嫌疑がある(Pickel 2010; Korman 2015, pp. 209–12)。たとえば、当の繫辞に上記の多義性が認められるとすると、トランプと彼の身体 *T* の関係について、「トランプは *T* であるが、*T* ではない(Trump is *T* but Trump is not *T*)」という言い回しは、前者の「である」は構成を表す一方で、後者の「ではない」は数的同一性の否定を表す、という仕方で矛盾なく解釈できるはずである。しかし、問題の言い回しは明らかに矛盾したものと聞こえるため、そうした解釈は成立しそうにない。よって、構成の「である」を持ち出す戦略は、当の繫辞について改革的な言語理解を私たちに要請するという点で非常に疑わしいものである。いずれにしても、言語的な解決を試みる第二の応答は、一難去ってまた一難の状態に陥るように思われる。

また、先の第一の応答にも次のような疑いが生じるだろう。たとえば、トランプとトランプの身体 *T* がともに(派生的であれ非派生的であれ)動物であることを認めると、トランプが位置する時空領域には奇妙なことに二人の動物がいることになるのではないか。この帰結は、「私たちは動物に属する」という常識を守るために構成主義者が払うべき犠牲なのだろうか。この問題に対する(ベイカーの)応答は次節で再び触れることにする。

5.2 一人余計な思考者問題またはゾンビ問題

続いて、動物説と密接に関連するもう一つの問題として、一人余計な思考者問題(*too many thinkers problem*)を取り上げることしよう。これは、先の第2.4節で見た「思考する動物論証」の変形版に相当し、次のような問題として提起することができる。

^{*53} 構成を表す「である」というアイディアは、人の構成主義のみならず、(特に彫像などの人工物の構成に関する)構成主義一般の形而上学の間でも比較的受け入れられたものである。Simons 1987, p. 194; Wiggins 1980, pp. 30–5; Lowe 2009, ch. 6 を見よ。

^{*54} Baker 1999b が論じるように、同様の仕方で、「私たちはみな、かつては胎児だった」という文も、「私たちはみな、かつて胎児だったもの(つまり動物)から構成される」と解釈し直すことができる。よって、後者の文が真であるおかげで前者の文も真となりうる。

- (26) 構成主義によれば、人であるトランプは動物 T から構成され、かつトランプが非派生的に思考するとき、 T も派生的に思考する。しかし、同時空領域にトランプと T の二人の思考者が存在することなどありえないように思われる。

すでに論じたように、特定の時空領域に二人以上の思考者が存在しうると考えることは、単に常識や直観に反するばかりではなく、いくつかの厄介な諸問題、特に認識的・言語的な問題を引き起こしてしまう。このため、人と身体という数的に異なる両者が(派生的か非派生的かどうかにかかわらず)ともに思考すると考える限りにおいて、構成主義は重大な困難に直面するように見える。

この問題に対する一つの応答は、人と動物がどちらも思考するという考えを最初から棄却するものである。第 4.5 節で見たシューメイカーの構成主義は次のように論じることができる。すなわち、トランプが思考するとしても、彼を構成する動物 T は思考という心理的性質を持ちえない。言い換えれば、ベイカーによる「性質の借り合い」というアイデアを少なくとも思考という性質については拒否するとき、構成主義に上記の問題は生じない。なぜならば、問題の時空領域で思考する者は常にトランプであり、彼を構成する動物 T は思考に関する分厚い性質——それは人に属する個体によってしか例化されない性質である——を持ちえないと考えられるからである。それゆえ、動物は(派生的に)思考するという主張を拒否すれば、最初から一人余計な思考者など存在しないと述べることができる。

しかし、この応答は少なくとも次の二つの別種の困難に直面する。一つ目の困難は、第 2.4 節で見たように、なぜ脳を持つ動物が思考できないのかが明らかではないということである。犬やイルカなどの動物は明らかに痛覚や選好に関する単純な心理的性質を持っている。これと類比的に、同じく動物のヒトもまた、痛覚や選好に関する心理的性質を持ち、さらに思考や推論、自己意識などのより高度な能力と関わる心理的性質も持つと考えることは非常に自然である (Olson 2018a)。動物の思考を拒否する構成主義者はこうした自然さを犠牲にせねばならないが、ヒトとヒト以外の動物の間の生物学的な連続性に鑑みれば、それはあまりに大きなコストである。

他方で、二つ目の困難は**ゾンビ問題 (zombie problem)**と呼ばれる (Olson 2018b)。トランプが思考や意識を含む様々な心理的性質を持つ一方で、彼を構成する動物 T は一切の心理的性質を欠くのだとすると、このとき T はトランプに瓜二つの(思考や意識を欠く)ゾンビのような存在である。いま問題となっている構成主義は、こうしたゾンビが人の存在する数だけ存在することを認めねばならない。すると、直観に反して、この世界にはおびただしい数の(おそらく 70 億以上の)ゾンビが実際に存在することが導かれる。この帰結が哲学的にも歓迎すべきでないことは、ゾンビの存在が、心理的性質の物理的性質への特定の随伴性を棄却してしまうことから明らかである。たとえば、心理的性質の物理的性質への弱いローカルな (weak local) 随伴性によると、いかなる可能世界 w においても、 w に存在する個体 x と y が物理的性質に関して不可識別であるならば、 x と y は心理的性質に関して不可識別でなければならない(つまり、同じ世界に存在する x と y があらゆる物理的性質を共有しながら異なる心理的性質を持つことはありえない)とされる。しかし、この現実世界においてトランプと T は物理的に不可識別であるにもかかわらず、ゾンビである T はトランプと違って心理的性質を欠くがゆえに、トランプと T は心理的には不可識別ではない。よっ

てトランプと T の存在は、心理的性質の物理的性質への弱いローカルな随伴性という一般に広く認められている事柄を否定してまう。さらに、もしトランプと T が物理的なタイプだけでなく物理的なトークン(個別的な物理的状態)も共有しているのだとすれば、思考などの心理的なトークン(個別的な心理的状態)において明らかに異なる状況にある彼らの存在は、**トークン物理主義**(*token physicalism*)または**トークン同一説**(*token-identity theory*)として知られる見解も拒否してしまう。その結果、動物の思考を拒否する構成主義者は、一人余計な思考者問題を容易に解決できる代償として、心の哲学の諸理論に対してあまりに強い制限と含意をもたらしてしまうのである^{*55}。

一人余計な思考者問題に対しては、シューメイカー以外の応答も可能である。それは、人と動物がともに思考者であることを認めつつ、思考者の**数え上げ方**を修正するものである(Baker 2000, p. 174; Baker 2007, p. 171)。ベイカーが論じているように、ある人とある動物はたしかに同一ではないが、そのことはそれらが「二つ」であることを必ずしも含意しない——なぜならば、それらが構成関係にあるときは「一つ」と数え上げるべきだからである。たとえば、トランプが非派生的に思考するとき、「性質の借り合い」により彼を構成する動物 T もまた派生的に思考する^{*56}。このときでも、当の時空領域に思考者がただ一人しか存在しないとベイカーが言えるのは、トランプと T が(数的に異なるとしても)統一性としての構成関係にあるからである。つまり、私たちは同一性だけでなく構成関係によっても事物を数え上げることができる。こうした根拠に基づけば、ベイカー流の構成主義は、人と動物という「二人の思考者」の存在を拒否することができる。

これと同様に、「トランプは(T と数的に同一ではないが)動物に属する」という主張は、「当の時空領域には、トランプと T という二つの動物が存在する」ということを含意しない。なぜならば、トランプが T から構成される限り、当の時空領域では同一性の代わりに構成関係すなわち統一性に基づいて動物を数え上げることができるからである。よって、ベイカーに従うと、第 5.1 節の最後で提起された問題はもはや生じない。トランプが位置する時空領域に存在するのは、二つの(しかも瓜二つの)動物ではなく、一つの動物—— T は非派生的に、トランプは派生的に属するような種の動物——なのである。

ただし、こうした数え上げ方法の改変が仮に正しいのだとしても、一人余計な思考者問題を数え上げと関係しないように書き換えれば、ベイカーの戦略は役に立たなくなるだろう(Inman 2018, pp. 358–9)。たとえば、先の(26)は次のように修正することができる。

^{*55} ただし、Shoemaker 2008; Shoemaker 2011; Shoemaker 2012 によれば、そもそもトランプと T は、特定の物理的性質(たとえば心理的性質を物理的に実現するような物理的な微小構造の性質)のタイプやトークンを共有していないとされる。そのため、少なくともシューメイカーの構成主義は、あらゆる物理的性質への弱いローカルな随伴性やトークン物理主義を必ずしも排除しないと考えられる。シューメイカーに対するその他の批判としては、Zimmerman 2009; Árnadóttir 2010 を見よ。

^{*56} ベイカーと同じく構成主義に立つ Sosa 1987; Corcoran 1999; Johnston 2010, p. 302 も、心理的性質の借り合いに近い説明を採用しているように見える。また、新ロック主義に与するその他の「後継者」の間でも、類似した見解がしばしば表明される。脳定位説に立つ Persson 1999; McMahan 2002, pp. 88–94; Parfit 2012 によると、心理的に機能する脳が非派生的に思考するおかげで各々の動物は派生的に思考する。また、二元論(またはそれに類する見解)に立つ Foster 1991, p. 203; Swinburne 1997, p. 155; Meixner 2010; Lowe 2012 でも同様の戦略がとられている。

(27) 構成主義によれば、人であるトランプは身体 T から構成され、かつトランプが非派生的に思考するとき、 T も派生的に思考する。しかし、同時空領域に、トランプと同一ではないが、トランプの思考内容を思考するような思考者が存在することなどありえないように思われる。

(26) に対する応答と異なり、おそらくベイカーは、(27) に対し「トランプと同一ではないが、トランプの思考内容を(派生的に)思考するような思考者(つまり彼の身体 T)が存在することはありえる」と抗弁するはずである。しかし、こうした答えが結局のところ、先の第 2.4 節で指摘された諸問題、特に認識的・言語的問題などを回避できていない限り、(27) のように改変された一人余計な思考者問題は依然として重大な困難として残る。たとえば、認識上の問題だけを取り上げると、トランプの占める空間的位置で構成関係にある二つの存在者(トランプと身体 T)のうち、トランプと数的に同一であるのはどちらの思考者であるかをトランプはどのようにして知ればよいのだろうか。

この問いに対しベイカーは、簡潔に「トランプは自身が(派生的ではなく)非派生的に人であるような思考者の方であると問題なく知る」と応答する(Baker 2007, pp. 173–4)。彼女によれば、「私はどちらなのか」という認識的問題が脅威に思えたのは、「身体 T は、トランプとは別物として存在するような(in addition to) もう一つの存在者である」という前提を動物説論者が置くためである。この前提は、構成関係を別個性と混同して、トランプと T がまったく別個の存在者であると想定してしまう。しかし、構成関係が同一性と別個性の間物としての統一性であったことを思い出せば、もはや構成主義にとって認識的な問題は脅威ではない(「私」の指示対象をめぐる言語上の問題や、一人余計な人の問題などについても同様の仕方で解消される)。よって、先の(27)に対する抗弁もまた、統一性としての構成関係を適切に理解すれば十分に維持可能なものとされる。

このように見ると、一人余計な思考者問題に対するベイカーの応答の正否は、数え上げ方法の改変および性質の借り合いというアイディアの正否に依拠することになるだろう。そして、この正否も最終的には、統一性としての構成関係という戦略全体の正否と強く関連することになるはずである。一人余計な思考者問題(あるいは思考する動物論証)が適切に解決されたかどうかを評価するには、構成関係や数え上げ、心理的な性質の借り合いをどのように理解し、シューメイカーやベイカーの見解が本当に維持可能であるかどうかを、構成主義の基本的主張から独立に検証する必要がある^{*57}。

5.3 根拠づけの問題

次の問題に移ろう。それは、一般に**根拠づけの問題**(*grounding problem*)と呼ばれ、次のような疑念として提起される(Olson 2001; Olson 2007, pp. 63–5)。

^{*57} 統一性としての構成関係に基づくベイカーの理論を批判的に検討する論者は少なくない。たとえば、統一性による数え上げについては Thomasson 2013; Sutton 2014 を、統一性による性質の借り合いについては Lim 2014; Francescotti 2017 を見よ。

- (28) 構成主義によれば、トランプと身体 T は、本質的な性質または実体種性質を異にするがゆえに数的に同一ではない。しかし、トランプと T が空間的に一致し物質的な諸部分を共有するならば、トランプと T の間の種性質や本質的な性質の違いはいかなるものに根拠づけられるのだろうか。

いま、トランプと彼を構成する動物 T は空間的に一致し、特定のサイズや重量などの性質を共有している。それだけでなく、それらはまったく同じ物質的諸部分から成る。それにもかかわらず、構成主義によれば、トランプと T は本質的な性質や実体種性質において異なる。では、ほとんどの性質において不可識別であるにもかかわらず、トランプと T はいかなる根拠で本質的な性質において異なると言えるのだろうか。こうした根拠づけの問題は「随伴性問題」とも呼ばれ——オルソン自身は**不可識別性問題** (*indiscernibility problem*) と呼ぶ——構成主義にとって最も標準的かつ根本的な問題の一つである。

この問題に対するベイカーの応答はこうである (Baker 1997; Baker 2000, ch. 3; Baker 2007)。トランプと T は特定の**関係的な** (*relational*) 性質においては異なっており、その違いこそが本質的な性質の違いを根拠づける。特に、トランプが存在するためには、 T と異なり、特定の意味で関係的な性質である一人称観点が要求される。ベイカーによると、「心の哲学における内在主義の強い拒否」 (Baker 2000, p. 73) に基づくと、一人称観点は自身以外の事物の存在や相互作用なくしては成立しえないものである。つまり、「 x が持つ一人称観点は、 x と他の事物との間に成立する関係に依存する」 (*ibid.*, p. 72)。さらに、自身のことを自身だと一人称的に考えるためには、人は言語を使いこなさねばならず、それは特定の言語的共同体の存在を要請する。つまり、「私たちが持つ[一人称的な]思考内容を思考する能力は、言語に決定的に依存する」 (Baker 2015a, p. 80)。それゆえ、人であるトランプの存在は、 T と違って、他の事物との相互作用や言語的共同体が存在するおかげで成立するという点で関係的である。よって、トランプと T は、一人称観点という関係的で社会的な性質によって識別可能である^{*58}。

他方で、ベイカーによれば、特定の動物 (ヒト) であることは——いわゆる関係の本質主義 (*relational essentialism*) に従い——形態学的な特徴ではなくその祖先系統 (*genealogical lineage*) に依存し、 T が存在するためにはヒトに特有の進化系統図が存在せねばならない (Baker 2007, p. 63)。換言すれば、ヒトという種性質が成立するには特定の進化系統図が存在せねばならないのに対し、人の場合には進化系統図に関する関係的要素は一切必要ではない。それゆえ、トランプと T は進化系統図に関する関係的な性質によっても識別可能である。以上をまとめれば、人と動物の間の本質的な性質や実体種性質の違いは、それぞれの存在にとって、(人以外の) その他の事物との相互作用や言語的共同体、特定の進化系統図が必要とされるかどうかの関係的または外在的な違いに根拠づけられるのである^{*59}。

^{*58} 類似した点は Wilson 2007 でも支持され、それによると人は志向性によって個別化され、内在的ではなく関係的に本性が決定される (ただし、このとき人は身体から特殊な意味で「構成」されると言われる)。またベイカーと同じく、根拠づけの問題に対し関係的で外在的な性質を用いる解決策は、Sutton 2012 でも提案されている (ただし、彼女は人については構成主義に立つことを控えている)。

^{*59} Baker 2000, pp. 186–7; Baker 2007, p. 119 によれば、こうしたベイカーの主張は、人と動物の本質的な性質が内在的な性質を含むマイクロレベルの物理的な性質に大域的に (*globally*) 随伴する可能性を排除しない (ただし、Sider 1999 の考えを援用すると、実際には「弱く (*weakly*) 大域的に」とせねばならないように思われる——しかしサイダー自身が後

このように、根拠づけ問題に対するベイカーの応答は関係的性質の違いに頼るものである。他方で、関係的または外在的な要素に頼らずに、内在的に根拠づけの問題に応答することも可能である。たとえば、ジョンストンに従って、トランプと動物 *T* が(本質を含む)様相的な性質において異なるのは、第 4.5 節で見たように、それらが異なる統一原理(形相)と異なる正真正銘の部分(質料)を持つからだとも考えることもできる。つまり、トランプと *T* は——最下層のレベルではまったく同じ単純物から成るのだとしても——異なる構成要素を持つがゆえに数的に区別される。したがって、ジョンストンの質料形相論によれば、トランプと動物 *T* の間で様相的性質や種が異なることは、端的にそれらが異なる正真正銘の部分を持つことによって根拠づけられる。

ただし、根拠づけの問題に対する一連の応答は、一人称観点および動物という性質が関係的なものであるという特定の主張、そして正真正銘の部分を描定する質料形相論的な主張に全面的に依拠するものである。よって、構成主義が根拠づけの問題を適切に解決できているかどうかは、こうした構成主義それ自体の妥当性から一定程度独立の主張がどれだけ成功しているかによるだろう。

5.4 総括

我々はここまで、一方で構成主義の内実・論証・多様性を、他方で構成主義の問題とその応答を見てきた。そこから明らかにすることができるのは次の二点である。第一に、第 4.5 節の概観は、たしかに構成主義が一枚岩でないことを示すものである一方で、構成主義者がみな共通して受け入れる特徴もまた存在することを教えるものである。その特徴とは、いくぶん大雑把に言えば、人と身体の実体種性質(または本質的性質)の相違への着目、そして人が持つ心理的な性質・機能の重視という二点である。構成主義者は往々にして、人と身体(動物)がまったく異なる種または種性質であることを認め、さらに身体ではなく人に属する私たちの本質や同一性が特定の心理的な特徴に依拠していることを積極的に擁護する。この二点は、動物説では見られなかった特徴である。特に、心や意識に関する第二の特徴に注目すると、構成主義が第 1 節で見た新ロック主義を部分的に引き継いだ立場であることがはっきりとするだろう。逆に述べれば、新ロック主義に欠けていた論点を、種や種性質に関する第一の特徴、そして構成関係という基本概念によって補強しようとした立場こそが、構成主義なのである。

第二に、第 5 節で見た一連の問題に対する応答は、各構成主義者が持ち出す道具立てによって多様である。具体的には、分厚い性質としての心理的な性質、構成の「である」、統一性に基づく性質の借り合いと数え上げの改変、関係的な性質または正真正銘の部分の違いに基づく根拠づけなどがこれまで提案されてきた。これらのアイデアをどのように発展させるか、あるいはその他の道具立てに基づく応答が可能かどうかの検討は、構成主義が今後課せられるべき課題である^{*60}。

の Sider 2008 において、弱い大域的な随伴性を弱すぎる依存関係だと認めている点に注意せねばならない)。この意味で、根拠づけの問題の別名である「随伴性問題」は多少ミスリーディングかもしれない。

^{*60} その他にも、構成主義に対しては恣意性の問題(*arbitrariness problem*)が提起される(DeGrazia 2002a; Sider 2002; Olson 2007, pp. 65–71)。これによると、動物によって構成されるものが人だけに限られることは恣意的であり、仮に一

6 結びにかえて：動物説と構成主義の係争点

我々はこちらまで、オルソンとベイカーの主張と応答を中心に、動物説と構成主義のサーヴェイを行ってきた。本稿の筆を擱く前に、最後に両者の係争点とそれに伴う含意を簡潔に述べることにしよう。

動物説と構成主義の間の主要な係争点の一つは、それぞれのマスターアーギュメントにおいて重要な役割を果たす前提から明確にすることができる。興味深いことに両見解は、次の点においては共通している。すなわち、私たちが占める各場所には各々の動物がたしかに存在するということである。ところが、動物の心理的な能力をどのように考えるかにおいて両見解は決定的に異なる。一方で動物説は、思考する動物論証において、動物こそが思考する存在者であるとする。他方で構成主義は、非同一性論証において、動物ではなく人こそが思考などの心理的な機能・能力を非派生的かつ本質的に持つと考える。つまり、動物説と構成主義は、思考をはじめとする心理的な機能・能力の（少なくとも非派生的な）主体が動物と人のどちらであるとするかにおいて決定的に異なる。少なくともこの正否は、それぞれのマスターアーギュメントの支持根拠の正当性に大きな影響を及ぼすはずである。

もちろん、この争点を解決したとしても、両見解には第 3 節および第 5 節で見たような一連の問題が突き付けられ、また第 2.5 節および第 4.5 節で見たように、両見解内部においても意見の不一致が少なからず残るだろう。まして、第 1 節で見たように、人の存在論上の立場は動物説と構成主義に限られるわけでもない。しかしながら、この両者のみに議論の焦点を当てたうえで、双方の核心的主張が直接に衝突する場面を捉えたとすれば、その分水嶺はやはり次のような点に集約されると思われる。すなわち、私たちが占める各場所に存在する各々の動物は、（非派生的に）思考するのか、それとも（少なくとも派生的にしか）思考しないのだろうか。この問題を十分な仕方では解決するには、「動物（ヒト）が思考をはじめとする心理的な機能・能力を持つ」とはいかなることかを詳細に解明せねばならない。そのためにはおそらく、思考などの心理的な機能・能力の本性とその主体のありかをめぐる心の哲学（くわえて動物心理学や神経科学などの関連領域）を巻き込んだ、複合領域的な議論が求められるだろう。さらに、動物説と構成主義の核心的主張から原則的に独立の問題として、オルソンが動物以外の思考主体の存在を否定する際に拠

人称観点の状況が人の構成を可能にするという意味で構成誘発的 (constitution-inducing) だとしても、たとえば二足歩行能力の獲得に関わる状況がなぜ構成誘発的ではないかについて何らかの説明が与えられねばならない。この問題に対しベイカーは、实在論とプラグマティズムの中間としての**実践的实在論 (Practical Realism)**の立場から、人間の関心や実践、規約を重んじる存在論を提案することで解決を図る (Baker 2007, pp. 43–8; Baker 2015b)。実践的实在論によると、人は实在物として存在する一方で、人のみが動物によって構成されること（すなわち二足歩行能力ではなく一人称観点のみが構成誘発的であること）は、そうした構成が人間に特有の関心や実践、規約などに依存することによって説明される。その結果、私たち人の実在は、部分的には人間中心的な活動によって支えられることとなる。なお、ベイカーの構成主義に対しては別の恣意性の問題も提起可能である (Inman 2018, pp. 360–3)。乳幼児が強固な一人称観点を通常発達させる種に属するがゆえに人であるのだとすると、妊娠初期の胎児についてもなぜそのように述べてはいけないのだろうか (注 48 も見よ)。この問いに答えるには、「強固な一人称観点を持つ発達途上にある未発達の一人称観点を持つことは人の構成にとって重要であるが、（強固なものであれ未発達であれ）一人称観点という能力を発達させるための何らかの能力を持つことは人の構成にとって重要ではない」と主張するための恣意的でない根拠が必要である。ベイカーの考えではその根拠は、おそらく実践的实在論によって与えられる。

り所とする考え、すなわち生物を例外とする最小主義の正否、そしてベイカーが人以外の（少なくとも非派生的な）思考主体の存在を否定する際に拠り所とする考え、すなわち統一性としての構成関係という戦略の正否も、別途検討する必要がある。このように、動物説と構成主義は実際のところ——その他のあらゆる哲学的論争の例に漏れず——豊かな論点を内包する地点で対峙することとなる。

「私たちとは何であるか」に対する答えは、誰しもがその当事者であるにもかかわらず、いまだ謎に包まれている。私たち自身を明らかにする哲学は、ヒトまたは人の長きにわたる歴史の中でようやく端緒についたばかりである。

謝辞

本稿の草稿に対して有益なコメント・助言をくださった、中崎紘登氏および本誌の二名の査読者にこの場を借りて厚くお礼申し上げます。

参考文献

- [1] 有馬 斉 2009, 人の生死の科学的客観性を支える二つの形而上学的な前提について, 『医療・生命と倫理・社会』第8巻, 126–37頁.
- [2] Árnadóttir, S. T. 2010, Functionalism and Thinking Animals, *Philosophical Studies* 147, 347–54.
- [3] ——— 2013, Bodily Thought and the Corpse Problem, *European Journal of Philosophy* 21, 575–92.
- [4] Ayers, M. R. 1991, *Locke: Epistemology and Ontology*, Vol. 2, London: Routledge.
- [5] Bailey, A. M. 2014, The Elimination Argument, *Philosophical Studies* 168, 475–82.
- [6] ——— 2015, Animalism, *Philosophy Compass* 10, 867–83.
- [7] ——— 2016, You Are an Animal, *Res Philosophica* 93, 205–18.
- [8] Baker, L. R. 1995, *Explaining Attitudes: A Practical Approach to the Mind*, Cambridge: Cambridge University Press.
- [9] ——— 1997, Why Constitution Is Not Identity, *Journal of Philosophy* 94, 599–621.
- [10] ——— 1999a, Unity Without Identity: A New Look at Material Constitution, *Midwest Studies in Philosophy* 23, 144–65.
- [11] ——— 1999b, What Am I?, *Philosophy and Phenomenological Research* 59, 151–9.
- [12] ——— 2000, *Persons and Bodies: A Constitution View*, Cambridge: Cambridge University Press.
- [13] ——— 2001, Material Persons and the Doctrine of Resurrection, *Faith and Philosophy* 18, 151–67.
- [14] ——— 2005, When Does a Person Begin?, *Social Philosophy and Policy* 22, 25–48.
- [15] ——— 2007, *The Metaphysics of Everyday Life: An Essay in Practical Realism*, Cambridge:

Cambridge University Press.

- [16] ——— 2008, Big-Tent Metaphysics, *Abstracta*, Special Issue 1, 8–15.
- [17] ——— 2012, Personal Identity: A Not-So-Simple View, in G. Gasser and M. Stefan eds., *Personal Identity: Complex or Simple?*, Cambridge: Cambridge University Press.
- [18] ——— 2013a, Technology and the Future of Persons, *Monist* 96, 37–53.
- [19] ——— 2013b, *Naturalism and the First-Person Perspective*, New York: Oxford University Press.
- [20] ——— 2015a, Human Persons as Social Entities, *Journal of Social Ontology* 1, 77–87.
- [21] ——— 2015b, Ontology Down-to-Earth, *Monist* 98, 145–55.
- [22] ——— 2018, Constitutionalism: Alternative to Substance Dualism, in Loose, Menuge, and Moreland 2018.
- [23] Belshaw, C. 2011, Animals, Identity and Persistence, *Australasian Journal of Philosophy* 89, 401–19.
- [24] Benovsky, J. 2018, *Eliminativism, Objects, and Persons: The Virtues of Non-Existence*, New York: Routledge.
- [25] Blank, A. ed. 2016, *Animals: New Essays*, Munich: Philosophia Verlag.
- [26] Blatti, S. 2007, Animalism, Dicephalus, and Borderline Cases, *Philosophical Psychology* 20, 595–608.
- [27] ——— 2012, A New Argument for Animalism, *Analysis* 72, 685–90.
- [28] ——— 2016a, Animalism, in E. N. Zalta ed., *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, winter 2016 edn., <https://plato.stanford.edu/archives/win2016/entries/animalism/>.
- [29] ——— 2016b, Headhunters, in Blatti and Snowdon 2016.
- [30] ——— 2018, We Are Animals, in L. Clapp ed., *Philosophy for Us*, San Diego: Cognella Academic Publishing.
- [31] Blatti, S. and Snowdon, P. F. eds. 2016, *Animalism: New Essays on Persons, Animals, and Identity*, New York: Oxford University Press.
- [32] Bourget, D. and Chalmers, D. J. 2014, What Do Philosophers Believe?, *Philosophical Studies* 170, 465–500.
- [33] Braddon-Mitchell, D. and Miller, K. 2004, How to Be a Conventional Person, *Monist* 87, 457–74.
- [34] Brueckner, A. and Buford, C. T. 2009, Thinking Animals and Epistemology, *Pacific Philosophical Quarterly* 90, 310–4.
- [35] Burke, M. B. 2003, Is My Head a Person?, in K. Petrus ed., *On Human Persons*, Berlin: De Gruyter.
- [36] Campbell, S. 2006, The Conception of a Person as a Series of Mental Events, *Philosophy and Phenomenological Research* 73, 339–58.
- [37] Campbell, T. and McMahan, J. 2010, Animalism and the Varieties of Conjoined Twinning, *Theo-*

retical Medicine and Bioethics 31, 285–310.

- [38] Carter, W. R. 1988, 1989, How to Change Your Mind, *Canadian Journal of Philosophy* 19, 1–14.
- [39] ——— 1999, Will I Be a Dead Person?, *Philosophy and Phenomenological Research* 59, 167–72.
- [40] Chisholm, R. M. 1978, Is There a Mind-Body Problem?, *Philosophic Exchange* 9, 25–34.
- [41] Clark, A. 2003, *Natural-Born Cyborgs: Minds, Technologies, and the Future of Human Intelligence*, New York: Oxford University Press. [『生まれながらのサイボーグ: 心・テクノロジー・知能の未来』, 呉羽真・久木田水生・西尾香苗訳, 春秋社, 2015 年]
- [42] Clark, A. and Chalmers, D. 1998, The Extended Mind, *Analysis* 58, 7–19.
- [43] Corcoran, K. J. 1999, Persons, Bodies, and the Constitution Relation, *Southern Journal of Philosophy* 37, 1–20.
- [44] ——— 2006, *Rethinking Human Nature: A Christian Materialist Alternative to the Soul*, Ada, MI: Baker Publishing Group.
- [45] Daly, C. and Liggins, D. 2014, Animalism and Deferentialism, *Dialectica* 67, 605–9.
- [46] Dancy, J. ed. 1997, *Reading Parfit*, Oxford: Blackwell.
- [47] DeGrazia, D. 2002a, Are We Essentially Persons? Olson, Baker, and a Reply, *Philosophical Forum* 33, 101–20.
- [48] ——— 2002b, *Animals Rights: A Very Short Introduction*, Oxford: Oxford University Press. [『動物の権利』, 戸田清訳, 岩波書店, 2003 年]
- [49] ——— 2005, *Human Identity and Bioethics*, Cambridge: Cambridge University Press.
- [50] ——— 2012, *Creation Ethics: Reproduction, Genetics, and Quality of Life*, New York: Oxford University Press
- [51] ——— 2016, Sentient Nonpersons and the Disvalue of Death, *Bioethics* 30, 511–9.
- [52] Dennett, D. C. 1992, The Self as a Center of Narrative Gravity, in F. S. Kessel, P. M. Cole, and D. L. Johnson eds., *Self and Consciousness: Multiple Perspectives*, Hillsdale, NJ: L. Erlbaum.
- [53] ——— 2017, *Brainstorms: Philosophical Essays on Mind and Psychology*, fortieth anniversary edn., Cambridge: MIT Press.
- [54] Doepke, F. C. 1996, *The Kinds of Things: A Theory of Personal Identity Based on Transcendental Arguments*, Chicago: Open Court.
- [55] Duncan, M. 2014, I Think, Therefore I Persist, *Australasian Journal of Philosophy* 93, 740–56.
- [56] 江口聡 2014, 「パーソン論」はその後どうなったの? 我々と同じ将来説、動物説、そして時間相対的利益説, 『現代社会研究』第 17 号, 95–108 頁.
- [57] Feldman, F. 1992, *Confrontations with the Reaper: A Philosophical Study of the Nature and Value of Death*, New York: Oxford University Press.
- [58] Francescotti, R. 2017, Mental Excess and the Constitution View of Persons, *Philosophical Papers* 46, 211–43.

- [59] Gillett, C. 2013, What You Are and the Evolution of Organs, Souls, and Superorganisms: A Reply to Blatti, *Analysis* 73, 271–9.
- [60] Hawley, K. 2001, *How Things Persist*, Oxford: Clarendon Press.
- [61] Heller, M. 1990, *The Ontology of Physical Objects: Four-Dimensional Hunks of Matter*, Cambridge: Cambridge University Press.
- [62] Hershenov, D. B. 2002, Olson’s Embryo Problem, *Australasian Journal of Philosophy* 80, 502–11.
- [63] ——— 2005, Do Dead Bodies Pose a Problem for Biological Approaches to Personal Identity?, *Mind* 114, 31–59.
- [64] ——— 2008, A Hylomorphic Account of Thought Experiments Concerning Personal Identity, *American Catholic Philosophical Quarterly* 82, 481–502.
- [65] ——— 2011, Soulless Organisms? Hylomorphism Vs. Animalism, *American Catholic Philosophical Quarterly* 85, 465–82.
- [66] Hood, B., Gjersoe, N. L., and Bloom, P. 2012, Do Children Think That Duplicating the Body also Duplicates the Mind?, *Cognition* 125, 466–74.
- [67] Hudson, H. 2001, *A Materialist Metaphysics of the Human Person*, Ithaca, NY: Cornell University Press.
- [68] ——— 2007, I Am Not an Animal!, in P. van Inwagen and D. W. Zimmerman eds., *Persons: Human and Divine*, Oxford: Oxford University Press.
- [69] Inman, R. 2018, Against Constitutionalism, in Loose, Menuge, and Moreland 2018.
- [70] Johansson, J. 2007, What Is Animalism?, *Ratio* 20, 194–205.
- [71] Johnston, M. 1987, Human Beings, *Journal of Philosophy* 84, 59–83.
- [72] ——— 2005, Constitution, in F. Jackson and M. Smith eds., *The Oxford Handbook of Contemporary Philosophy*, Oxford: Oxford University Press.
- [73] ——— 2006, Hylomorphism, *Journal of Philosophy* 103, 652–98.
- [74] ——— 2007, “Human Beings” Revisited: My Body Is Not an Animal, in D. W. Zimmerman ed., *Oxford Studies in Metaphysics*, vol. 3, Oxford: Oxford University Press.
- [75] ——— 2010, *Surviving Death*, Princeton: Princeton University Press.
- [76] ——— 2016, Remnant Persons: Animalism’s Undoing, in Blatti and Snowdon 2016.
- [77] Kind, A. 2015, *Persons and Personal Identity*, Oxford: Polity Press.
- [78] Korman, D. Z. 2015, *Objects: Nothing Out of the Ordinary*, New York: Oxford University Press.
- [79] 倉田剛 2017, 『現代存在論講義 II: 物質的対象・種・虚構』, 新曜社.
- [80] Kovacs, D. M. 2016, Self-Made People, *Mind* 125, 1071–99.
- [81] Langford, S. 2014, On What We Are and How We Persist, *Pacific Philosophical Quarterly* 95, 356–71.
- [82] Lewis, D. 1976, Survival and Identity, in A. O. Rorty ed., *The Identities of Persons*, Berkeley:

University of California Press.

- [83] Liao, S. M. 2006, The Organism View Defended, *Monist* 89, 334–50.
- [84] Lim, J. 2014, Derivative Properties and the Too Many Thinkers Problem, *Metaphysica* 15, 369–80.
- [85] ——— 2018, Strategy for Animalism, *Axiomathes* 28, 419–33.
- [86] Locke, J. 1975 [1690], *An Essay Concerning Human Understanding*, P. H. Nidditch ed., Oxford: Clarendon Press.
- [87] Loose, J. J., Menuge, A. J. L., and Moreland, J. P. eds. 2018, *The Blackwell Companion to Substance Dualism*, Oxford: Wiley Blackwell.
- [88] Lowe, E. J. 1996, *Subjects of Experience*, Cambridge: Cambridge University Press.
- [89] ——— 2001, Identity, Composition, and the Simplicity of the Self, in K. J. Corcoran ed., *Soul, Body, and Survival: Essays on the Metaphysics of Human Persons*, Ithaca, NY: Cornell University Press.
- [90] ——— 2009, *More Kinds of Being: A Further Study of Individuation, Identity, and the Logic of Sortal Terms*, Malden, MA: Wiley-Blackwell.
- [91] ——— 2012, Non-Cartesian Substance Dualism, in B. P. Göcke ed., *After Physicalism*, Notre Dame: University of Notre Dame Press.
- [92] Luper, S. 2014, Persimials, *Southern Journal of Philosophy*, Spindel Suppl. 52, 140–62.
- [93] Mackie, D. 1999, Personal Identity and Dead People, *Philosophical Studies* 95, 219–42.
- [94] Madden, R. 2016, Thinking Parts, in Blatti and Snowdon 2016.
- [95] Markosian, N. 2008, Three Problems for Olson’s Account of Personal Identity, *Abstracta*, Special Issue 1, 16–22.
- [96] ——— 2010, Identifying the Problem of Personal Identity, in J. K. Campbell, M. O’Rourke, and H. S. Silverstein eds., *Time and Identity*, Cambridge, MA: MIT Press.
- [97] McDowell, J. 1997, Reductionism and the First Person, in Dancy 1997.
- [98] McMahan, J. 2002, *The Ethics of Killing: Problems at the Margins of Life*, Oxford: Oxford University Press.
- [99] Meixner, U. 2010, Materialism Does Not Save the Phenomena—and the Alternative Which Does, in R. C. Koons and G. Bealer eds., *The Waning of Materialism*, New York: Oxford University Press.
- [100] Merricks, T. 1998, There Are No Criteria of Identity over Time, *Noûs* 32, 106–24.
- [101] ——— 2001, *Objects and Persons*, Oxford: Oxford University Press.
- [102] Nagel, T. 1986, *The View from Nowhere*, New York: Oxford University Press. [『どこでもないところからの眺め』, 中村昇・山田雅大・岡山敬二・齋藤宜之・新海太郎・鈴木保早訳, 春秋社, 2009年]
- [103] Nichols, P. 2010, Substance Concepts and Personal Identity, *Philosophical Studies* 150, 255–70.

- [104] Nichols, S. and Bruno, M. 2010, Intuitions about Personal Identity: An Empirical Study, *Philosophical Psychology* 23, 293–312.
- [105] Noonan, H. W. 1998, Animalism Versus Lockeanism: A Current Controversy, *Philosophical Quarterly* 48, 302–18.
- [106] ——— 2003, *Personal Identity*, 2nd edn., New York: Routledge.
- [107] Nozick, R. 1981, *Philosophical Explanations*, Cambridge, MA: Harvard University Press. [『考えることを考える』, 坂本百大・西脇与作・戸田山和久・横山輝雄・柴田正良・服部裕幸・森村進・永井均・若松良樹・高橋文彦・荻野弘之訳, 青土社, 1997 年]
- [108] Oderberg, D. S. 2007, *Real Essentialism*, London: Routledge.
- [109] Olson, E. T. 1995, Why I Have No Hands, *Theoria* 61, 182–97.
- [110] ——— 1997a, Was I Ever a Fetus?, *Philosophy and Phenomenological Research* 57, 95–110.
- [111] ——— 1997b, *The Human Animal: Personal Identity Without Psychology*, New York: Oxford University Press.
- [112] ——— 2001, Material Constitution and the Indiscernibility Problem, *Philosophical Quarterly* 51, 227–55.
- [113] ——— 2003, An Argument for Animalism, in R. Martin and J. Barresi eds., *Personal Identity*, Malden, MA: Blackwell.
- [114] ——— 2004, Animalism and the Corpse Problem, *Australasian Journal of Philosophy* 82, 265–74.
- [115] ——— 2007, *What Are We? A Study in Personal Ontology*, New York: Oxford University Press.
- [116] ——— 2008, Replies, *Abstracta*, Special Issue 1, 32–42.
- [117] ——— 2013, The Person and the Corpse, in B. Bradley, F. Feldman, and J. Johansson eds., *The Oxford Handbook of Philosophy of Death*, New York: Oxford University Press.
- [118] ——— 2014, The Metaphysical Implications of Conjoined Twinning, *Southern Journal of Philosophy*, Spindel Suppl. 52, 24–40.
- [119] ——— 2015a, Animalism and the Remnant-Person Problem, in J. Fonseca and J. Gonçalves eds., *Philosophical Perspectives on the Self*, Bern: Peter Lang Publishing.
- [120] ——— 2015b, On Parfit's View That We Are Not Human Beings, *Royal Institute of Philosophy*, Suppl. 76, 39–56.
- [121] ——— 2016a, The Remnant-Person Problem, in Blatti and Snowdon 2016.
- [122] ——— 2016b, The Role of the Brainstem in Personal Identity, in Blank 2016.
- [123] ——— 2018a, For Animalism, in Loose, Menuge, and Moreland 2018.
- [124] ——— 2018b, The Zombies Among Us, *Noûs* 52, 216–26.
- [125] Parfit, D. 1984, *Reasons and Persons*, Oxford: Clarendon Press. [『理由と人格: 非人格性の倫理へ』, 森村進訳, 勁草書房, 1998 年]

- [126] ——— 2008, Persons, Bodies, and Human Beings, in T. Sider, J. Hawthorne, and D. W. Zimmerman eds., *Contemporary Debates in Metaphysics*, Malden, MA: Blackwell.
- [127] ——— 2012, We Are Not Human Beings, *Philosophy* 87, 5–28.
- [128] Perry, J. 1972, Can the Self Divide?, *Journal of Philosophy* 69, 463–88.
- [129] Persson, I. 1999, Our Identity and the Separability of Persons and Organisms, *Dialogue* 38, 521–33.
- [130] Pickel, B. 2010, There Is No ‘Is’ of Constitution, *Philosophical Studies* 147, 193–211.
- [131] Plantinga, A. 2007, Against Materialism, *Faith and Philosophy* 23, 3–32.
- [132] Pollock, J. L. 2008, What Am I? Virtual Machines and the Mind/Body Problem, *Philosophy and Phenomenological Research* 76, 237–309.
- [133] Quinton, A. 1962, The Soul, *Journal of Philosophy* 59, 493–403.
- [134] Robinson, H. 2006, Personal Identity, the Self and Time, in A. Batthyany and A. Elitzur eds., *Mind and Its Place in the World: Non-Reductionist Approaches to the Ontology of Consciousness*, Frankfurt: Ontos Verlag.
- [135] ——— 2016, *From the Knowledge Argument to Mental Substance: Resurrecting the Mind*, Cambridge: Cambridge University Press.
- [136] Rovane, C. 1998, *The Bounds of Agency: An Essay in Revisionary Metaphysics*, Princeton: Princeton University Press.
- [137] Searle, J. 1983, *Intentionality: An Essay in the Philosophy of Mind*, Cambridge: Cambridge University Press. [『志向性:心の哲学』, 坂本百大監訳, 誠信書房, 1997 年]
- [138] Sharpe, K. W. 2015, Animalism and Person Essentialism, *Metaphysica* 16, 53–72.
- [139] Shoemaker, D. 2007, Personal Identity and Practical Concerns, *Mind* 116, 317–57.
- [140] ——— 2016, The Stony Metaphysical Heart of Animalism, in Blatti and Snowdon 2016.
- [141] Shoemaker, S. 1963, *Self-Knowledge and Self-Identity*, Ithaca, NY: Cornell University Press. [『自己知と自己同一性』, 菅豊彦・浜渦辰二訳, 勁草書房, 1989 年]
- [142] ——— 1970, Persons and Their Pasts, *American Philosophical Quarterly* 7, 269–85.
- [143] ——— 1984, Personal Identity: A Materialist’s Account, in S. Shoemaker and R. Swinburne eds., *Personal Identity*, Oxford: Blackwell. [「人格の同一性:唯物論者の説明」, 『人格の同一性』所収, 寺中平治訳, 産業図書, 1986 年]
- [144] ——— 1999, Self, Body, and Coincidence, *Proceedings of the Aristotelian Society*, Suppl. 73, 287–306.
- [145] ——— 2004, Functionalism and Personal Identity: A Reply, *Noûs* 38, 525–33.
- [146] ——— 2008, Persons, Animals, and Identity, *Synthese* 162, 313–24.
- [147] ——— 2011, On What We Are, in S. Gallagher ed., *The Oxford Handbook of the Self*, Oxford: Oxford University Press.

- [148] ——— 2012, Coincidence Through Thick and Thin, in K. Bennett and D. W. Zimmerman eds., *Oxford Studies in Metaphysics*, Vol. 7, Oxford: Clarendon Press.
- [149] Sider, T. 1999, Global Supervenience and Identity across Times and Worlds, *Philosophy and Phenomenological Research* 59, 913–37.
- [150] ——— 2001, *Four-Dimensionalism: An Ontology of Persistence and Time*, Oxford: Clarendon Press. [『四次元主義の哲学: 持続と時間の存在論』, 中山康雄監訳, 小山虎・齋藤暢人・鈴木生郎訳, 春秋社, 2007 年]
- [151] ——— 2002, Review of L. R. Baker's *Persons and Bodies*, *Journal of Philosophy* 99, 45–8.
- [152] ——— 2008, Yet Another Paper on the Supervenience Argument against Coincident Entities, *Philosophy and Phenomenological Research* 77, 613–24.
- [153] Simons, P. 1987, *Parts: A Study in Ontology*, Oxford: Clarendon Press.
- [154] Smith, B. and Brogaard, B. 2003, Sixteen Days, *Journal of Medicine and Philosophy* 28, 45–78.
- [155] Snowdon, P. F. 1990, Persons, Animals, and Ourselves, in C. Gill ed., *The Person and the Human Mind: Issues in Ancient and Modern Philosophy*, Oxford: Oxford University Press.
- [156] ——— 2003, Objections to Animalism, in K. Petrus ed., *On Human Persons*, Frankfurt: Ontos Verlag.
- [157] ——— 2014a, Animalism and the Lives of Human Animals, *Southern Journal of Philosophy*, Spindel Suppl. 52, 171–84.
- [158] ——— 2014b, *Persons, Animals, Ourselves*, New York: Oxford University Press.
- [159] Sosa, E. 1987, Subjects Among Other Things, *Philosophical Perspectives* 1, 155–87.
- [160] Stone, J. 2005, Why There Still Are No People, *Philosophy and Phenomenological Research* 70, 174–92.
- [161] Strawson, G. 2017, *The Subject of Experience*, New York: Oxford University Press.
- [162] Sutton, C. S. 2012, Colocated Objects, Tally-Ho: A Solution to the Grounding Problem, *Mind* 121, 703–30.
- [163] ——— 2014, The Supervenience Solution to the Too-Many-Thinkers Problem, *Philosophical Quarterly* 64, 619–39.
- [164] 鈴木生郎 2008, 一致のパラドクスと種概念, 『科学哲学』第 41 巻 1 号, 15–28 頁.
- [165] ——— 2011, 死の害の形而上学, 『科学基礎論研究』第 39 巻 1 号, 13–24 頁.
- [166] ——— 2014, 人の同一性, 鈴木生郎・秋葉剛史・谷川卓・倉田剛『ワードマップ 現代形而上学: 分析哲学が問う, 人・因果・存在の謎』所収, 新曜社.
- [167] Swinburne, R. 1997, *The Evolution of the Soul*, rev. ed., Oxford: Clarendon Press.
- [168] Thomasson, A. L. 2013, The Ontological Significance of Constitution, *Monist* 96, 54–72.
- [169] Thomson, J. J. 1997, People and Their Bodies, in Dancy 1997.
- [170] Thornton, A. K. 2016, Varieties of Animalism, *Philosophy Compass* 11, 515–26.

- [171] Toner, P. 2011, Hylemorphic Animalism, *Philosophical Studies* 155, 65–81.
- [172] ——— 2014, Hylemorphism, Remnant Persons and Personhood, *Canadian Journal of Philosophy* 44, 76–96.
- [173] Tye, M. 2003, *Consciousness and Persons: Unity and Identity*, Cambridge, MA: MIT Press.
- [174] Tzinman, R. 2016, Against the Brainstem View of the Persistence of Human Animals, in Blank 2016.
- [175] Unger, P. 1979, Why There Are No People, *Midwest Studies in Philosophy* 4, 177–222.
- [176] ——— 1990, *Identity, Consciousness, and Value*, New York: Oxford University Press.
- [177] ——— 2006, *All the Power in the World*, New York: Oxford University Press.
- [178] van Inwagen, P. 1990, *Material Beings*, Ithaca, NY: Cornell University Press.
- [179] Watson, J. L. 2016, Thinking Animals and the Thinking Parts Problem, *Philosophical Quarterly* 66, 323–40.
- [180] Wiggins, D. 1980, *Sameness and Substance*, Oxford: Blackwell.
- [181] ——— 1996, Replies, in S. Lovibond and S. G. Williams eds., *Identity, Truth, and Value: Essays for David Wiggins*, Oxford: Blackwell.
- [182] ——— 2016, *Continuants: Their Activity, Their Being and Their Identity, Twelve Essays*, New York: Oxford University Press.
- [183] Williams, B. 1970, The Self and the Future, *Philosophical Review* 79, 161–80.
- [184] Wilson, R. A. 2007, A Puzzle about Material Constitution & How to Solve It: Enriching Constitution Views in Metaphysics, *Philosophers' Imprint* 7, 1–20.
- [185] Yang, E. 2013, Thinking Animals, Disagreement, and Skepticism, *Philosophical Studies* 166, 109–21.
- [186] ——— 2015, Unrestricted Animalism and the Too Many Candidates Problem, *Philosophical Studies* 172, 635–52.
- [187] Zimmerman, D. W. 2003, Material People, in M. J. Loux and D. W. Zimmerman eds., *The Oxford Handbook of Metaphysics*, Oxford: Oxford University Press.
- [188] ——— 2008, Problems for Animalism, *Abstracta*, Special Issue 1, 23–31.
- [189] ——— 2009, Properties, Minds, and Bodies: An Examination of Sydney Shoemaker's Metaphysics, *Philosophy and Phenomenological Research* 78, 673–738.
- [190] ——— 2010, From Property Dualism to Substance Dualism, *Aristotelian Society Supplementary Volume* 84, 119–50.

著者情報

横路佳幸(慶應義塾大学)